



訳注 『宋書』 樂志二訳注稿(一)

佐藤, 大志 ; 釜谷, 武志 ; 佐竹, 保子 ; 柳川, 順子 ; 林, 香奈 ; 狩野, 雄

(Citation)

未名, 37:75-159

(Issue Date)

2019-03

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCOI)

<https://doi.org/10.24546/81012593>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81012593>



〈訳注〉

『宋書』樂志二訳注稿（一）

佐藤大志・釜谷武志・佐竹保子

柳川順子・林 香奈・狩野 雄

はじめに

『宋書』樂志一訳注稿（一）〜（三）（本誌二十一号〜二十三号）に続いて、『宋書』樂志二訳注稿の連載を始める。樂志についての簡単な説明は、樂志一訳注稿（一）の冒頭をご覧いただきたいが、樂志一が古代から劉宋に至る音樂史概論であるのに対して、樂志二以降は歌詞を載せる。なかでも樂志二は郊祀や宗廟の祭祀に用いられたいわゆる郊廟歌辭と、宮中の宴會に用いられた燕射歌辭を主として収めている。樂志三・四が相和歌辭や鼓吹鏡歌などの、われわれになじみのある俗樂の歌詞を中心としているのと対照的に、祭祀や儀式での雅樂の歌詞がほとんどで、いわゆる文學作品からやや離れている。ともすれば千篇一律になりがちなこうした雅樂の歌詞を、しかし傅玄や顔延之といった当時を代表する文人が制作していることを考慮に入れれば、郊廟歌の歌詞を対象とするにも何らかの意義が存しよう。このほど釜谷を代表者として計六名からなる研究組織が「漢魏六朝期樂府の総合的研究」をテーマとして、日本學術振興會科学研究費補助金（B）の交付を受け、『宋書』樂志二の訳注を作成することになっ

た。本稿はその成果の一部である。

底本には百衲本を用い、中華書局の新旧二種の点校本などを参考にした。底本を改めた場合は、その旨を注記した。『宋書樂志校注』『歷代樂志律志校釈』第二分冊を活用したことも、樂志一訳注稿と同様である。押韻に関しては韻字と『広韻』の韻目を記したが、うち「。」は換韻を表し、「、」は通押を示す（たとえば九一ページで「祥・皇」は下平10「陽」。「臻」は上平19「臻」、「天」は下平1「先」とあるのは、「祥・皇」と「臻」「天」との間で換韻されていること、「臻」と「天」とは『広韻』では別の韻目に属するが、通用して押韻していることを表す）。また注で引用する典籍の原文のあとに（へ）を附して引いていながら、出処を記載していないものは、『毛詩』の毛伝、『尚書』や三礼の鄭玄注など、通常参看される注である。

（釜谷武志）

蔡邕論敘漢樂曰^①、一曰郊廟神靈^②、二曰天子享宴^③、三曰大射辟雍^④、四曰短簫鏡歌^⑤。

蔡邕 漢樂を論敘して曰わく、一に曰わく郊廟神靈、二に曰わく天子享宴、三に曰わく大射辟雍、四に曰わく短簫鏡歌と。

蔡邕が漢の樂を論述して、「一は郊廟神靈、二は天子享宴、三は大射辟雍、四は短簫鏡歌」と言っている。

①蔡邕論敘漢樂曰 蔡邕（二三一一九二）は、『後漢書』卷六

不及得成。……其撰集漢事、未見録以繼後史。適作靈紀及十意、

○下に伝があり、『後漢書』蔡邕伝に「蔡邕字伯喈、陳留圉人

又補諸列傳四十二篇、因李傕之亂、湮沒多不存。」とある。こ

也。……邕前在東觀、與盧植・韓說等撰補後漢記、會遭事流離、

の漢樂に関する蔡邕の発言は『後漢書』札樂志中の注に引用さ

れる蔡邕「礼楽志」の「漢樂四品」の記事に拠る。

② 一曰郊廟神靈 郊廟の祭祀に用いる樂。蔡邕「礼楽志」(『後漢書』礼楽志中)に「漢樂四品、一曰大予樂、典郊廟・上陵・殿諸食舉之樂。郊樂、易所謂先王以作樂崇德、殷薦上帝、周官若樂六變、則天神皆降、可得而禮也。宗廟樂、虞書所謂琴瑟以詠、祖考來假、詩云肅雍和鳴、先祖是聽。食舉樂、王制謂天子食舉以樂、周官王大食則令奏鍾鼓。」とある。また『宋書』樂志一に「於是公卿奏曰、臣聞德盛而化隆者、則樂舞足以象其形容、音聲足以發其哥詠。故薦之郊廟、而鬼神享其和。用之朝廷、則君臣樂其度。使四海之內、徧知至德之盛、而光輝日新者、禮樂之謂也。故先王殷薦上帝、以配祖考、蓋當其時而制之矣。」とあり、君主の徳を象つた樂舞を郊廟で演奏することで神靈に世の調和を告げると言う。

③ 二曰天子享宴 天子と群臣との饗宴に用いる樂。蔡邕「礼楽志」(『後漢書』礼楽志中)に「三曰黃門鼓吹、天子所以宴樂羣臣、詩所謂坎坎鼓我、蹲蹲舞我者也。」とある。また『左伝』成公十二年に「賓曰、…世之治也、諸侯間於天子之事、則相朝也。於是乎有享宴之禮、享以訓共儉、宴以示慈惠。共儉以行禮、而

慈惠以布政。政以禮成。」とあり、享宴の礼は天子の恭儉と慈惠を諸侯に示し、その礼を以て政治を行ううたために行われる。

④ 三曰大射辟雍 蔡邕「礼楽志」(『後漢書』礼楽志中)に言う「周頌雅樂」のこと。蔡邕「礼楽志」に「二曰周頌雅樂、典辟雍・饗射・六宗・社稷之樂。辟雍・饗射、孝經所謂移風易俗、莫善於樂、禮記曰、揖讓而治天下者、禮樂之謂也。社稷、所謂琴瑟擊鼓、以御田祖者也。禮記曰、夫樂施於金石、越於聲音、用乎宗廟・社稷、事乎山川、鬼神、此之謂也。」とある。「大射」は郊廟の祭祀を担当する者を選ぶために諸侯群臣が競射する儀式。『周礼』天官・司裘に「王大射、則共虎侯・熊侯・豹侯、設其鵠。諸侯則共熊侯・豹侯、卿大夫則共麋侯、皆設其鵠。」とあり、鄭玄の注に「大射者、爲祭祀射、王將有郊廟之事、以射擇諸侯及羣臣與邦國所貢之士、可以與祭者射者、可以觀德行、其容體比於禮、其節比於樂、而中多者得與於祭。」とある。「辟雍」は、もとは天子が設立した大学であったが、後漢以降、郷飲や大射などの儀礼を行う場となった。『後漢書』祭祀志中に「(建武中元元年)是年初營北郊、明堂・辟雍・靈臺未用事(白虎通曰、辟雍、所以行禮樂、宣德化也。辟者、象璧圓、以法天

也。雍者、壅之以水、象教化流行也。辟之爲言積也、積天下之

⑤ 四日短簫鐃歌

「短簫鐃歌」は、軍樂。『後漢書』礼樂志中引

道德。雍之爲言壅也、壅天下之儀則、故謂辟雍也。」とあり、

蔡邕「礼樂志」(『後漢書』礼樂志中)に「其短簫鐃歌、軍樂也。

『後漢書』礼儀志上には「明帝永平二年三月、上始帥羣臣躬養

其傳曰、黃帝・岐伯所作、以建威揚德、風勸士也。蓋周官所謂

三老、五更于辟雍。行大射之禮。」とある。

王(師)大(捷)〔獻〕則令凱樂、軍大獻則令凱歌也。」とある。

晉郊祀歌五篇 傅玄造

晉の郊祀歌五篇

傅玄造る

天命有晉 穆穆明明

天 有晉に命ず 穆穆明明たり

我其夙夜 祗事上靈

我其れ夙夜 祗だ上靈に事う

常于時假 迄用有成

常を時の假に 用て成有るに迄る

於薦玄牡 進夕其牲

於^あ薦^{すす}玄牡を薦め 夕に其の牲を進む

崇徳作樂 神祇是聽

崇徳 樂を作し 神祇是れ聽けり

右祠天地五郊夕牲歌一篇

右天地五郊を祠る夕牲の歌一篇

晉の郊祀歌五篇 傅玄の作

天は晉に命じられる、端麗にして明察。

私は朝も夜も、ひたすらに神靈をお祭りいたします。

長久の功績を大いなる歌にしきつらねて、ここに功績が完成いたします。

ああ黒き牛をすすめ、夕べにその犠牲を神に捧げましょう。

先王の徳を尊んでその功績を音楽に表せば、神靈も（その音楽を）お聴き届けになりましょう。

右は天地五郊を祠る夕牲の歌一篇

○押韻 「明・性」は下平12「庚」、「靈・聽」は下平15「青」、「成」は下平14「清」。

① 晋郊祀歌五篇 『宋書』樂志一に「晋武帝泰始二年、改制郊廟

哥、其樂舞亦仍舊也。」また、『晋書』樂志上に「及武帝受命之

初、百度草創。泰始二年、詔郊祀明堂禮樂權用魏儀、遵周室肇

稱殷禮之義、但改樂章而已、使傅玄爲之詞云。」とあり、泰始

二年（二六六）に郊廟や明堂の礼樂は魏の儀礼を用い、樂章の

み改めて、傅玄に詩を作らせたとある。

② 傅玄 傅玄（二一七―二一八）は『晋書』卷四七に伝があり、

「傅玄字休奕、北地泥陽人也。……玄少孤貧、博學善屬文、解

鍾律。」とある。

③ 天命有晋 天が晋に天下を治めることを命じる。『尚書』皇陶

謨に「天命有徳、五服五章哉。」とある。「有」は国名に冠せら

れる語助詞。

④ 穆穆明明 「穆穆」は言語動作の端麗なさま。「明明」は明察

なさま。ここは天が晋に命を下す有り様を言う。『毛詩』大雅

・文王に「穆穆文王、於緝熙敬止（穆穆、美也）。」とある。ま

た『毛詩』大雅・常武に「赫赫明明、王命卿士。（明明然察也。

箋云、……顯著乎昭察乎、宣王之命卿士爲大將也。）」とある。

また傅玄「晋鼓吹曲・釣竿行」（『宋書』樂志四）に「庶事康、

穆穆明明。荷百祿、保無極、永泰平。」とある。

⑤ 夙夜 朝も夜も。『毛詩』周頌・我將に「伊嘏文王、既右饗之。

我其夙夜、畏天之威、于時保之（箋云、于於時是也。早夜敬天、

於是得安文王之道。）」とある。

⑥ 上靈 神靈。『三國志』魏書・文帝紀に引く曹植「文帝誄」に

「惟黃初七年五月七日、大行皇帝崩、嗚呼哀哉。……德儕先皇、

功侔太古。上靈降瑞、黃初叔祜。」とある。

⑦ 常于時假 「常」は常道。ここでは先王の功績を言う。「時假」

の「時」は「是」に通じる。『毛詩』大雅・思齊に「肆戎疾不

殄、烈假不遐（肆、故今也。戎、大也。故今大疾害人者、不絶

殄、烈假不遐（肆、故今也。戎、大也。故今大疾害人者、不絶

之而自絶也。烈、業。假、大也。」とある。この句と類似した

句が、『毛詩』周頌・思文に見え、「貽我來牟、帝命率育。無此

疆爾界、陳常于時夏（箋云、……此謂遺我來牟、天命以是循存

后稷養天下之功、而廣大其子孫之國、無此封竟於女今之經界、

乃大有天下也。用是故、陳其久常之功、於是夏而歌之。夏之屬

有九。」とある。鄭箋は「時夏」を王の功績を述べた大いなる

樂歌とする。「假」は「夏」に通じる。『釈名』釈天に「夏、假

也。寬假萬物、使生長也。」とある。この句は「時假」を『毛

詩』周頌・思文の鄭箋を踏まえて樂曲の名とするか、それを踏

まえず「假」を中夏の意とするかで解釈が異なる。ここでは前

者で解した。

⑧ 迄用有成 成功に至ることを言う。『毛詩』周頌・維清に「肇

禋、迄用有成。維周之禎（禎、祥也。箋云、文王造此征伐之法、

至今用之而有成功。謂伐紂克勝也。征伐之法、乃周家得天下之

吉祥。」とある。なお「有」を『晋書』樂志は「其一」に作る。

⑨ 於薦玄牡 犠牲の黒牛を神にささげることと言う。『毛詩』周

頌・離に「於薦廣牡、相予肆祀（箋云、……於進大牡之牲、百辟

與諸侯又助我陳祭祀之饌、言得天下之歡心。」とある。「玄牡」

は祭祀に用いる犠牲の黒い牛。『尚書』湯誥に「敢用玄牡、敢
昭告于上天神后、請罪有夏。」とある。

⑩ 崇德作樂 先王の徳行を尊んで、その樂を作ることを言う。『周

易』豫に「象曰、雷出地奮。豫、先王以作樂崇徳、殷薦之上帝、

以配祖考（正義曰、……先王以作樂崇徳者、雷是鼓動、故先王

法此鼓動而作樂、崇盛徳業、樂以發揚盛徳故也。殷薦之上帝者、

用此殷盛之樂、薦祭上帝也。」

⑪ 神祇 天神と地祇。『尚書』商書・湯誥に「爾萬方百姓、懼其

凶害、弗忍荼毒、並告無辜于上下神祇（言百姓兆民並告無罪、

稱冤訴天地）」

⑫ 是聽 神靈が聞き届けられる。『毛詩』周頌・有瞽に「既備乃

奏、簫管備舉。嗶嗶厥聲、肅雝和鳴。先祖是聽、我客戾止、永

觀厥成。」とある。

⑬ 天地 天地の祭祀。天は南郊で祀られ、地は北郊で祀られる。

『宋書』礼志三に「（泰始二年）二月丁丑、郊祀宣皇帝以配天、

宗祀文皇帝於明堂、以配上帝。是年十一月、有司又議奏、古者

丘郊不異、宜并圓丘方澤於南北郊、更修治壇兆。其二至之祀、

合於二郊。帝又從之。一如宣帝所用王肅議也。是月庚寅冬至、

帝親祠圓丘於南郊。自是後、圓丘方澤不別立至今矣。」とあり、
 晋の武帝は受禪の翌年泰始二年（二六六）に、曹魏の制度が鄭
 玄の説に基づいて円丘と方丘とが南北郊とは別に立てられてい
 たのに対して、王肅説に従って円丘は南郊に、方沢は北郊に併
 合し、冬至の祭祀は南郊で、夏至の祭祀は北郊で行なうように
 定めた（金子修一「魏晋より隋唐に至る郊祀・宗廟の制度につ
 いて」『史学雑誌』八八巻一〇号 一九七九、及び同氏『古代
 中国と皇帝祭祀』汲古書院、二〇〇一参照）。

⑭五郊 東郊（青帝）、南郊（赤帝）、西郊（白帝）、北郊（黒帝）、
 中郊（黄帝）を言い、天子は各時節の氣をここで迎える。『後

漢書』明帝紀に「（永平二年）是歲、始迎氣於五郊（續漢書曰、
 迎氣五郊之兆。四方之兆各依其位。中央之兆在未、壇皆二尺。
 立春之日、迎春於東郊、祭青帝句芒。……立夏之日、迎夏於南
 郊、祭赤帝祝融。……先立秋十八日、迎黃靈於中兆、祭黃帝后
 土。……立秋之日、迎秋於西郊、祭白帝蓐收、車服皆白。……
 立冬之日、迎冬於北郊、祭黒帝玄冥。」とある。

⑮夕牲 夕牲は祭祀の前日に犠牲を捧げる道具を点検すること。
 『漢書』丙吉伝に「始顯少爲諸曹、嘗從祠高廟、至夕牲日、乃
 使出取齋衣（師古曰、未祭一日、其夕展視牲具、謂之夕牲）」

| | | | |
|-------------------|-------------------|-------------------------|--------------------------|
| 宣文烝哉 ^① | 日靖四方 ^② | 宣文 烝なるかな | 日に四方を靖んず |
| 永言保之 ^③ | 夙夜匪康 ^④ | 永く言 ^{こと} 之を保ち | 夙夜 康んずるに匪ず |
| 光天之命 ^⑤ | 上帝是皇 ^⑥ | 天の命を光 ^{おほ} いにし | 上帝是れ皇す |
| 嘉樂殷薦 ^⑦ | 靈祚景祥 ^⑧ | 嘉樂 殷 ^{さか} んに薦め | 靈 景祥を祚 ^{むく} ゆ |
| 神祇降假 ^⑨ | 享福無疆 ^⑩ | 神祇 降り假 ^{いた} り | 福を享 ^う くること疆無し |

右祠天地五郊迎送神歌一篇 右天地五郊を祠る迎送神歌一篇

先祖文帝は君たるにふさわしいお方、日に四方の国を治め安んじられた。

長くその道を保たれ、日夜休まれることもない。

天から授かった命を大いにし、上帝はこれを讃えられた。

良き音楽が盛大に天を祭り、神霊は大いなる祥瑞を授けられる。

天地の神々が天より降り、その福祿は限りなし。

右は天地五郊を祠るとき神を送迎する歌一篇

○押韻 「方・祥・疆」は下平10「陽」、「康・皇」は下平11「唐」。

①宣文烝哉 「宣文」は晋の高祖司馬懿を指す。『晋書』宣帝紀

に「(嘉平三年)九月庚申、葬于河陰、諡曰文、後改諡宣文。」

とある。「烝哉」は君主にふさわしい人物であったことを言う。

『毛詩』大雅・文王有声に「文王有聲、通駿有聲。通求通寧、

通觀厥成。文王烝哉(烝、君也。箋云、君哉者、言其誠得人君

之道)。」とある。

②日靖四方 日々天下を治め安らかにする。『毛詩』周頌・我將

に「儀式刑文王之典、日靖四方。伊嘏文王、既右饗之(儀、善

刑、法。典、常。靖、謀也。箋云、靖、治也。受福曰嘏。我儀

則式象法行文王之常道、以日施政于天下、維受福於文王、文王

既右而饗之。言受而福之。」とある。

③永言保之 長くその道を保全することを言う。『毛詩』周頌・

載見に「率見昭考、以孝以享。以介眉壽、永言保之。思皇多祐

(箋云……以致孝子之事、以獻祭祀之禮、以助考壽之福、長我

安行此道、思成王之多福)。」とある。

④匪康 休むことがないことを言う。『毛詩』大雅・公劉に「篤

公劉、匪居匪康(箋云、厚乎公劉之爲君也、不以所居爲居、不

以所安爲安)。」とある。

⑤光天之命 天命を大いにする。『毛詩』周頌・維天之命に「維

天之命。於穆不已(孟仲子曰、大哉天命之無極、而美周之禮也。

箋云、命猶道也。天之道於乎美哉。動而不止、行而不已。」とある。「光」は大いにする。『左伝』隱公三年に「光昭先君之令德、可不務乎。吾子其無廢先君之功。」とある。

⑥上帝是皇 天が王の功績を賞賛する。『毛詩』周頌・執競に「不顯成康、上帝是皇（不顯乎、其成大功、而安之也。顯、光也。皇、美也。箋云、不顯乎、其成安祖考之道。言其又顯也。天以是故美之、予之福祿）」。

⑦嘉樂殷薦 「嘉樂」は金石の楽器。『左伝』定公十年に「齊・魯之故、吾子何不聞焉。事既成矣、而又享之、是勤執事也。且犧象不出門嘉樂不野合（嘉樂、鍾磬也。）」とある。「殷薦」は盛んな樂で天を祭る。『周易』豫に「象曰、雷出地奮。豫。先王以作樂崇德、殷薦之上帝、以配祖考。」とある。

天祚有晉 其命惟新①
受終于魏② 奄有兆民③
燕及皇天④ 懷柔百神⑤
不顯遺烈 之德之純⑥
享其玄牡⑦ 式用肇禋⑧

天 有晉に祚し 其の命 惟れ新たなり
終りを魏に受け 兆民を奄有す
燕んじて皇天に及び 百神を懷柔す
顯れ、ざらんや遺烈の 徳の純なる
其の玄牡を享し 式用て禋を肇む

⑧靈祚景祥 「祚」は幸いを授ける。陸機「漢高祖功臣頌」(『文選』卷四七)に「跨功踰德、祚爾輝章。」とある。「景祥」は大いなる祥瑞。『毛詩』小雅・小明に「嗟嗟君子、無恒安息。靖共爾位、好是正直。神之聽之、介爾景福。」とある。

⑨假 いたる。『毛詩』大雅・烝民に「天監有周、昭假于下（箋云、假、至也。）」とある。

⑩享福無疆 「享福」は天の福祿を受ける。『三国志』魏書・劉表伝に「故爲將軍計者、不若舉州以附曹公、曹公必重德將軍。長享福祚、垂之後嗣、此萬全之策也。」とある。「無疆」は極まるところがないこと。『毛詩』商頌・列祖に「嗟嗟烈祖、有秩斯祐。申錫無疆、及爾斯所（箋云……嗟嗟乎、我功烈之祖成湯、既有此王天下之常福。天又重賜之、以無竟界之期。）」

神祇來格^㉑ 福祿是臻^㉒

神祇來り格り、福祿是れ臻る

天は晋に幸いを授け、その命は新たなもの。

帝位の終わりを魏から譲り受け、万民を統べ治める。

その安らかさは天にまで及び、多くの神々を招き寄せられた。

先王の遺業、その徳の大いなることを明らかにせずにおられようか。

黒き牛をささげ、ここに天を祀る祭祀を始める。

神々が降り下り、福祿がここにもたらされる。

○押韻 「新・民・神・禋」は下平17「眞」、 「純」は下平18「諄」、 「臻」は下平19「臻」。

①其命惟新 晋王朝に新たに天命が下されたことを言う。『毛詩』

大雅・文王に「文王在上、於昭于天。周雖舊邦、其命維新（乃

新在文王也。箋云、大王聿來胥宇而國於周、王迹起矣。而未有

天命、至文王而受命。言新者美之也。）」とある。

②受終于魏 晋が帝位を魏より禪譲されたことを言う。『尚書』

舜典に「正月上日、受終于文祖（終謂堯終帝位之事。文祖者堯

文徳之祖廟。）」とある。

③奄有兆民 「奄有」はすべてを治める。『毛詩』大雅・皇矣に

「受祿無喪、奄有四方（喪亡奄大也。箋云、王季以有因心則友

之徳、故世世受福祿、至於覆有天下。）」とある。「兆民」は万

民。『尚書』呂刑に「一人有慶、兆民頼之。其寧惟永（天子有

善、則兆民頼之。其乃安寧長久之道。）」とある。なお「兆」を

『晋書』樂志は「黎」に作る。

④燕及皇天 王の徳が天下を安んじ、それが天にまで及ぶことを

言う。『毛詩』周頌・雝に「燕及皇天、克昌厥後（燕、安也。

箋云、……文王之徳、安及皇天、謂降瑞應、無變異也。）」とあ

る。

⑤ 懷柔百神 多くの神々を招き安んじることを言う。『毛詩』周

頌・時邁に「莫不震疊、懷柔百神。及河喬嶽。允王維后（箋云

……王行巡守、其至方岳之下、來安羣神、望于山川、皆以尊卑祭之信哉。武王之宜、爲君美之也。）」とある。なお「柔」を『晋

書』樂志は「和」に作る。

⑥ 不顯遺烈 之徳之純 この二句は、先祖の大いなる功績を明らか

かにすることを言う。『毛詩』周頌・維天之命に「於乎不顯、

文王之徳之純（純、大。箋云……於乎不光明與、文王之施徳教之無倦已、美其與天同功也。）」とある。「遺烈」は先王之遺業。

『史記』越王句踐世家の太史公論贊に「句踐可不謂賢哉。蓋有

禹之遺烈焉。范蠡三遷皆有榮名、名垂後世。）」とある。なお「不」を『晋書』樂志、『樂府詩集』は「丕」に作る。

⑦ 享其玄牡 郊に天を祭るのに犠牲の牛を捧げることが、『毛詩』

魯頌・閟宮に「皇皇后帝、皇祖后稷、享以騂犧。是饗是宜、降

福既多（騂、赤。犧、純也。箋云、皇皇后帝謂天也。成王以周公功大、命魯郊祭天、亦配之以君祖后稷。其牲用赤牛純色。與天子同也。天亦饗之宜之、多予之福。）」とある

⑧ 肇禋 天を祀る祭祀を始めて行うことを言う。『毛詩』周頌・

維清に「維清緝熙、文王之典。肇禋（肇、始。禋、祀也。箋云、

文王受命、始祭天、而枝伐也。周禮以禋祀祀昊天上帝）、迄用有成、維周之禎。）」とある。

⑨ 神祇來格 神靈が降りいたる。『尚書』益稷に「夔曰、戛擊鳴

球、搏拊琴瑟以詠、祖考來格（此舜廟堂之樂、民悅其化、神歆其祀、禮備樂和、故以祖考來至明之。）」

⑩ 福祿是臻 幸いがもたらされる。『毛詩』大雅・鳧鷖に「公尸

燕飲、福祿來成（箋云、爾者女成王者。女酒般清美、以與公尸燕樂飲酒之。故祖考以福祿來成女。）」とある。「臻」は至る。『毛詩』小雅・菀柳に「有鳥高飛、亦傳于天。彼人之心、于何其臻

（箋云、傳、臻、皆至也。）」

時邁其猶 昊天^①天子^②之

祐享^③有晉 兆民^④戴^⑤之

時に其^{みら}猶^{おこな}を邁^い 昊天^①天子^②之^を子^とす

祐^{たす}けて有^{きよう}晉^を享^し 兆民^④之^を戴^く

畏天之威^④ 敬授民時^⑤

天の威を畏れ 敬んで民に時を授く

不顯不承^⑥ 於猶繹思^⑦

顯われざらんや承けざらんや 於^あ猶^{なち}は繹^のべられん

皇極^⑧斯建 庶績^⑨咸熙

皇極 斯れ建てられ 庶績^{みな}咸熙^{まろ}まる

庶幾夙夜^⑩ 惟晉之祺^⑪

庶^ね幾^がわくは夙夜 惟れ晉^{さい}の祺^いなれ

ふさわしい時にその道を行い広め、天は我が子のように愛される。

天は晋を助けて祭祀を受け、万民もその徳を尊び仰ぐ。

大いなる天の力を畏れ、民に正しい時節を教え授けられる。

その徳が天に現れず、人に継承されないことがあるうか。ああその道は広く行われる。

天下の規則がここに定められ、多くの治績が得られるであろう。

願わくは朝も晩も、晋が天の吉祥を得られますように。

○押韻 「之・時・思・熙・祺」は上平7「之」。

①時邁其猶 昊天之子 この二句は『毛詩』周頌・時邁に基づく。

『毛詩』周頌・時邁に「時邁其邦、昊天其子之（邁、行。箋云

……武王既定天下、時出行其邦國。謂巡守也。天其子愛之。」

とあり、武王が天下が定まった後に各地を巡行して天地山川百

神を祀り、天が武王を子のように愛したことを言う。「邁」は

ここでは広く行うの意。『尚書』大禹謨に「禹曰、朕徳罔克、

民不依。皐陶邁種徳、徳乃降黎民、懷之。〈邁、行。……言已

無徳民所不能依。皐陶布行其徳、下治於民、民歸服之。〉とあ

る。「猶」は道。『毛詩』小雅・采芣に「蠢爾蠻荆、大邦爲讎。

方叔元老、克壯其猶（猶、道也）。」とあり、また『礼記』礼器

に「詩云、匪革其猶、聿追來孝（革、急也。猶、道也。聿、述也。言文王改作者、非必欲急行己之道、乃追述先祖之業、來居此爲孝）。」

② 祐享 天が晋を助けて祭祀を受ける。『毛詩』周頌・我將に「我將我享、維羊維牛、維天其右之（將、大。享、獻也。箋云、將猶奉也。我奉養我享祭之羊牛、皆充盛肥腩、有天氣之力助。言神饗其德而右助之。）」とある。

③ 兆民戴之 「戴」は尊んで仰ぐ。『史記』周本紀に「古公亶父復脩后稷、公劉之業、積德行義、國人皆戴之。」とある。なお「兆民」を『晋書』樂志は「肇庶」に作る。

④ 畏天之威 天の威を畏れつつしむ。『毛詩』周頌・我將に「我其夙夜、畏天之威、于時保之（箋云、于、於。時、是也。早夜敬天、於是得安文王之道。）」とある。

⑤ 敬授民時 民に正しい時節を教え授ける。『尚書』堯典に「乃命羲和、欽若昊天、曆象日月星辰、敬授人時（重黎之後、羲氏和氏世掌天地四時之官。故堯命之使敬順昊天。昊天言元氣廣大星四方中星辰日月所會、曆象其分節。敬記天時以授人也。此舉其目下別序之。）」

⑥ 不顯不承 君王の徳が天に現れ、人に継承されることを言う。

『毛詩』周頌・清廟に「對越在天、駿奔走在廟。不顯不承、無射於人斯（駿、長也。顯於天矣、見承於人矣。不見厭於人）矣。箋云、駿、大也。諸侯與衆士、於周公祭文王、俱奔走而來、在廟中助祭、是不光明文王之徳與。言其光明之也。是不承順文王志意與。言其承順之也。此文王之徳、人無厭之。」「不」を『樂府詩集』は「丕」に作る。

⑦ 於猶釋思 「猶」は道。注①を参照。「釋」は布き広めて世に行われること。『毛詩』周頌・賚に「文王既勤止。我應受之。數時釋思。我徂維求定（釋、陳也。箋云、敷猶徧也。文王既勞心於政事、以有天下之業。我當而受之、敷是文王之勞心、能陳釋而行之。時周之命、於釋思（箋云、勞心者是周之所以受天命、而王之所由也。於女諸臣受封者、陳釋而思行之、以文王之功業勸之。）」とある。

⑧ 皇極 天下を統治する規則。『尚書』洪範の天が禹に与えた洪範九疇の第五に「皇極、皇建其有極（大中之道、大立其有中、謂行九疇之義）、斂時五福、用敷錫厥庶民、惟時厥庶民、于汝極、錫汝保極。）」とある。

⑨庶績 多くの職業の治績。『尚書』堯典に「允釐百工、庶績咸

⑩惟晉之祺 晋が天の吉祥を得ることを言う。『毛詩』周頌・維

熙（允、信。釐、治。工、官。績、功。咸、皆。熙、廣也。言

清に「迄用有成、維周之禎（迄、至。禎、祥也。箋云、文王造

定四時成歲歷、以告時授事、則能信治百官、衆功皆廣、歎其善。」

此征伐之法、至今用之。而有成功、謂伐紂克勝也。征伐之法乃

⑩庶幾夙夜 朝も夜も願う。『毛詩』周頌・振鷺に「在彼無惡、

周家得天下之吉祥。」とある。「祺」は吉祥。

在此無數。庶幾夙夜、以永終譽。」とある。

宣文惟后 ① 克配彼天 ②

宣文 惟れ后 ① 克く彼の天に配す ②

撫寧四海 ③ 保有康年 ④

四海を撫寧し ③ 康年を保有す ④

於乎緝熙 ④ 肆用靖民 ⑤

於乎緝熙にして ④ 肆に用て民を靖んず ⑤

爰立典制 ⑥ 爰修禮紀 ⑦

爰に典制を立て ⑥ 爰に禮紀を修う ⑦

作民之極 ⑧ 莫匪資始 ⑨

民の極を作り ⑧ 資始に匪ざる莫し ⑨

克昌厥後 ⑩ 永言保之 ⑪

克く厥の後を昌んにし ⑩ 永く言に之を保つ ⑪

右饗天地五郊歌三篇

右天地五郊に饗する歌三篇

先祖文帝は君たるにふさわしいお方、その功績はあの天に並び配される。

天下四方を平定し、実り豊かな年を長く保たれる。

ああその徳は光り輝いて、故に天下を治めて民を安んぜられる。

そこで法律制度を定め、礼儀作法を整えられた。

民が従うべき中正の道を作り、いずれも事のはじめのより所となる。

よく子孫を盛んにし、長くいつまでも保ち続けられる。

右は天地五郊で神靈を饗するときの歌三篇

○押韻 「天・年」は下平1「先」、「民」は上平17「眞」。「紀・始」は上声6「止」、「之」は上平7「之」。「紀・始・之」は声調の区分を越えての通押か。

①惟后 君たるにふさわしいことを言う。『毛詩』周頌・時邁に

「懷柔百神、及河喬嶽、允王維后（箋云……王行巡守、其至方

岳之下、來安羣神、望于山川、皆以尊卑祭之。信哉武王之宜、

爲君美之也。）」とある。

②克配彼天 その功績が天と並ぶことを言う『毛詩』周頌・思文

に「思文后稷、克配彼天。（箋云、克、能也。……周公思先祖

有文德者、后稷之功能配天。）」

③保有康年 「保有」は保持して長く続ける。『毛詩』周頌・桓

に「天命匪解、桓桓武王。保有厥土、于以四方。」とある。「康

年」は豊年。『毛詩』周頌・臣工に「明昭上帝。迄用康年（康、

樂也。箋云……謂爲珍瑞天下所休慶也。此瑞乃明見於天、至今

用之有樂歲。五穀豐熟。）」とある。

④緝熙 ひかりかがやくさま。『毛詩』大雅・文王に「穆穆文王、

於緝熙敬止（緝熙、光明也。）」とある。

⑤肆用靖民 「肆」はゆえに。「靖民」は民を安んじる。『毛詩』

周頌・昊天有成命に「於緝熙、單厥心、肆其靖之（靖、和也。

箋云……於美乎此成王之德也。既光明矣、又能厚其心矣、爲之

不解倦、故於其功終能心安之。）」

⑥典制 法律や制度。『荀子』礼論に「其理誠大矣、擅作典制辟

陋之説入焉而喪。）」

⑦禮紀 礼法。『後漢書』謝該伝に引く謝該を推薦する孔融の上

表文に「今尚父鷹揚、方叔翰飛、王師電驚、羣凶破殄、始有夔

弓臥鼓之次、宜得名儒、典綜禮紀。」とある。

⑧民之極 民が従うべき中正の道。『尚書』君奭に「公曰、前人

敷乃心、乃悉命汝、作汝民極（前人文武、布其乃心、爲法度。

始者、釋其乾元稱大之義、以萬象之物皆資取乾元、而各得始生、

乃悉以命汝矣、爲汝民立中正矣。」とある。

不失其宜、所以稱大也。」

⑨資始 物事のはじめに拠りどころとなるもの。『周易』乾の象

⑩克昌厥後 子孫を盛んにすることを言う。『毛詩』周頌・雖に

伝に「彖曰、大哉乾元、萬物資始、乃統天（正義曰……萬物資

「燕及皇天、克昌厥後。」とある。

（佐藤大志）

前所作天地郊明堂歌五篇

傅玄造

前に作る所の天地郊明堂歌五篇

傅玄造る

皇矣有晉 時邁其德^②

^{おほ}皇いなるかな有晉 ^{おほ}時に其の徳を邁^{おほ}う

受終于天^③ 光濟萬國^④

終りを天より受け ^{かがや}光かしく萬國を濟^{おほ}む

萬國既光 神定厥祥

萬國既に光けば 神は厥^その祥を定む

虔于郊祀 祗事上皇^⑤

郊祀に虔^{つし}み 祗^{つし}みて上皇を事とす

祗事上皇 百祿是臻

祗みて上皇を事とすれば 百祿是れ臻^{いた}る

巍巍祖考^⑦ 克配彼天^⑧

巍巍たる祖考 克^よく彼の天に配す

嘉牲匪歆^⑩ 德馨惟饗

嘉牲^{よこ}歆^こぶに匪^うず 德馨^こ惟れ饗^うけん

受天之祚 神和四暢^⑪

天の祚を受け 神和^わし四^よもに暢^のびん

右天地郊明堂夕牲歌

右は天地郊明堂夕牲歌

先に制作した「天地郊明堂歌」五篇

傅玄の作

大いなるかな晋王朝、建国のおりに天子は徳を行ない広められた。
天より帝位を授かり、輝かしくも天下を統へ治められた。

天下が輝くと、天つ神はこの国に幸いを下すことを決められた。

うやうやくしく郊祀の祭りに臨み、つつしんで天つ神をお祭りする。

つつしんで天つ神をお祭りすれば、あまたの福が集まり来たる。

高々とそびえる父祖は、天に併せて祭るにふさわしい。

神が受けられるのはめでたき犠牲のお供えではなく、香り高い徳をこそ受けてくださる。

天から幸いを授かり、こころは和らぎあまねく伸びやかならん。

右は天郊・地郊・明堂での祭祀前夜の歌

○押韻 「徳・國」は入声²⁵「徳」。「祥・皇」は下平¹⁰「陽」。「臻」は上平¹⁹「臻」、 「天」は下平¹「先」。「饗」は上声³⁶「養」、 「暢」は去声⁴¹「漾」。

①前所作天地郊明堂 「前所作」という以上、「後所作」がある
はずで、傳玄は「天地郊明堂歌」を複数回作成していることになる。本詩の前に置かれる「天地五郊歌」が、時間的には逆に後に制作されたものか。『宋書』樂志一の「爰逮晋氏、泰始之初、傳玄作晉郊廟哥詩三十二篇。」によれば、泰始の初年もしくは二年に複数の郊祀歌を作った可能性がある。

『晋書』武帝紀に「泰始元年冬十二月丙寅、設壇于南郊、百僚在位及匈奴南單于四夷會者數萬人、柴燎告類于上帝曰……。(二年二月)丁丑、郊祀宣皇帝以配天、宗祀文皇帝於明堂以配上帝。」とある泰始元年の作が本詩か。しかし、『晋書』礼志上に「魏元帝咸熙二年十二月甲子、……禪位于晋。丙寅、武皇帝設壇場于南郊、柴燎告類于上帝、是時尚未有祖配。泰始二年正月、詔

曰、「有司前奏郊祀權用魏禮、朕不慮改作之難、令便爲永制、衆議紛互、遂不時定、不得以時供饗神祇、配以祖考。日夕難企、貶食忘安、其便郊祀。」時羣臣又議、五帝卽天也。王氣時異、故殊其號、雖名有五、其實一神。明堂南郊、宜除五帝之坐、五郊改五精之號、皆同稱昊天上帝、各設一坐而已。地郊又除先后配祀。帝悉從之。二月丁丑、郊祀宣皇帝以配天、宗祀文皇帝於明堂以配上帝。」とあり、泰始元年の時点では祖先を配祭してないが、この歌詞には配祭が見えることから、泰始二年に制作された可能性が大きい。

②時邁其德 『毛詩』周頌・時邁に「時邁其邦、昊天其子之、實右序有周。薄言震之、莫不震疊。懷柔百神、及河喬嶽（邁、行。震、動。疊、懼。懷、來。柔、安。喬、高也。高岳、岱宗也。箋云、薄猶甫也。甫、始也。允、信也。武王既定天下、時出行其邦國謂巡守也。天其子愛之。右助次序其事謂多生賢知使爲之臣也）。「邁」は『毛詩』では天下を巡狩する意であるが、ここでは『尚書』大禹謨に「禹曰、朕德罔克、民不依。皐陶邁種德、德乃降、黎民懷之（邁、行。種、布。降、下。懷、歸。言已無德、民所不能依。皐陶布行其德、下治於民、民歸服之。）」

とある、徳を敷き行なう意に解した。

③受終于天 「受終」は帝位を禪讓されること。『尚書』舜典に

「舜讓于德、弗嗣。正月上日、受終于文祖（上日、朔日也。終謂堯終帝位之事。文祖者、堯文德之祖廟。）」

④光濟 天下を安んじる。班彪「王命論」に「舜亦以命禹、暨于稷契、咸佐唐虞、光濟四海、奕世載徳。」

⑤上皇 天上にいる最高の帝王。『莊子』天運に「巫咸招曰、來、吾語女。天有六極五常、帝王順之則治、逆之則凶。九洛之事、治成徳備、監照下土、天下戴之、此謂上皇。」

⑥百祿 多くの福祿。『毛詩』小雅・天保に「天保定爾、俾爾猷穀。罄無不宜、受天百祿。降爾遐福、維日不足（猷、福。穀、祿。罄、盡也。箋云、天使女所福祿之人、謂羣臣也。其舉事盡得其宜、受天之多祿。）」

⑦巍巍祖考 「巍巍」は高く大きいさま。『論語』泰伯に「子曰、巍巍乎、舜禹之有天下也、而不與焉。」「祖考」は祖先、殊に亡き祖父と亡き父。『毛詩』小雅・信南山に「祭以清酒、從以騂牡、享于祖考。執其鸞刀、以啓其毛、取其血膋。」

⑧克配彼天 「配天」は、天子が天の神を祭祀する祭に祖先の靈

を併せ祭る。『漢書』郊祀志上に「周公相成王、王道大洽、制禮作樂、……郊祀后稷以配天、宗祀文王於明堂以配上帝。」

⑨嘉牲 りっぱないけにえ。『史記』封禪書に「公卿言、皇帝始

郊見太一雲陽、有司奉瑄玉嘉牲薦饗。是夜有美光、及晝、黃氣

上屬天。」

⑩德馨 善政を行なう徳こそがかぐわしい。『尚書』君陳に「我

聞曰、至治馨香、感于神明、黍稷非馨、明德惟馨。爾尚式時周

於赫^あ大晉 膺^あ天景祥 天の景祥を膺く

二帝邁^あ德 宣^あ茲重光

我皇受命 奄^あ有萬方 我が皇は命を受け 萬方を奄有す

郊祀配享 禮樂孔章 郊祀に配享し 禮樂孔だ章らかなり

神祇嘉饗 祖考是皇 神祇は饗を嘉して 祖考是れ皇いなり

克昌厥後^あ 保^あ卬無疆 克^あく厥^あの後を昌^あんにし 卬^あを保んずること疆^あり無からん

右天地郊明堂降神歌

右は天地郊明堂降神歌

ああ輝かしい大晋王朝は、天の大いなる幸いを受ける。

宣帝・文帝の二帝は徳を広く行ない、輝かしい上にも輝かしいこの徳を敷きのべられた。

公之猷訓（政治之至者、芬芳馨氣、動於神明、所謂芬芳非黍稷之氣、乃明德之馨、勵之以德。）『札記』札器に「故君子有禮、則外諧而内無怨。故物無不懷仁、鬼神饗徳。」

⑪四暢 四方に伸び広がる。『札記』樂記に「先王本之情性、稽

之度數、制之禮義、合生氣之和、道五常之行、使之陽而不散、

陰而不密、剛氣不怒、柔氣不懾、四暢交於中而發作於外、皆安

其位而不相奪也。」

わが君は天命を受けて、よるずの国を領有された。

郊の祭祀で先帝を併せ祭り、礼樂はきわめて明らかに備わっている。

天神地祇が祭祀を嘉して、祖先も大いにあらわれる。

盛んに子孫を榮えさせ、幸いを与えてくださること極まりなからん。

右は天郊・地郊・明堂で神を降臨させる歌

○押韻 「祥・方・章・皇・疆」は下平10「陽」、「光」は下平11「唐」。

①於赫 ああ功績が輝くの意。『毛詩』商頌・那に「於赫湯孫、

穆穆厥聲（於赫湯孫、盛矣湯、爲人子孫也。箋云、穆穆、美也。

於盛矣、湯孫、謂太甲也。）」

『尚書』大禹謨に「皇天眷命、奄有四海、爲天下君（眷、視。

奄、同也。言堯有此德、故爲天所命、所以勉舜也。）」

②二帝 晋の武帝の祖父と父、宣帝と文帝をさす。先の「天地郊

明堂夕牲歌」の注①を参照。

⑤孔章 はなはだ明らか。『尚書』伊訓に「聖謨洋洋、嘉言孔彰。

惟上帝不常、作善降之百祥、作不善降之百殃。）」

③重光 この上なく明るい日月をさらに重ねた輝き。徳のある二

人の天子にたとえる。『尚書』顧命に「昔君文王・武王、宣重

⑥是皇 これ大いにの意。先祖の靈が輝かしく降臨することはい

う。『毛詩』小雅・楚茨に「祀事孔明、先祖是皇。神保是饗、

光、奠麗陳教則肆（言昔先君文・武、布其重光、繫世之徳、定

天命施陳教則勤勞。）」

禮甚明之故、精氣歸咤之。其鬼神又安而享其祭祀。）」

④奄有 おおうようにあまねく有する。『毛詩』商頌・玄鳥に「古

帝命武湯、正域彼四方、方命厥后、奄有九有（正、長。域、有

⑦克昌厥後 後嗣を安泰にすることができ。『毛詩』周頌・雝

に「燕及皇天、克昌厥後。綏我眉壽、介以繁祉（箋云、繁、多

也。文王之德安及皇天、謂降瑞應無變異也。又能昌大其子孫、
 安助之以考壽與多福祿。」
 ⑧ 胙 「祚」に通じる。「晋書」樂志上は「祚」に作る。

| | | | |
|------------------|------------------|------------------------|--|
| 整泰壇 ^① | 祀皇神 ^② | 泰壇を整え | 皇神を祀る |
| 精氣感 ^③ | 百靈賓 ^④ | 精氣感じて | 百靈賓す |
| 蘊朱火 | 燎芳薪 | 朱火を蘊み | 芳薪を燎す |
| 紫煙游 | 冠青雲 | 紫煙游 ^{たなび} き | 青雲を冠す |
| 神之體 | 靡象形 ^⑤ | 神之體は | 形を象 ^{かたち} づくる靡 ^な し |
| 曠無方 ^⑥ | 幽以清 ^⑦ | 曠として方無く | 幽として以て清し |
| 神之來 | 光景照 | 神之來たるや | 光景照らす |
| 聽無聞 | 視無兆 ^⑧ | 聽けども聞こゆる無く | 視 ^み れども兆無し |
| 神之至 | 舉歆歆 ^⑨ | 神之至るや | 舉げて歆歆たり |
| 靈爽協 ^⑩ | 動余心 | 靈爽にして協 ^{かな} い | 余が心を動かす |
| 神之坐 | 同歡娛 | 神之坐するや | 同 ^{とも} に歡娛す |
| 澤雲翔 | 化風舒 ^⑪ | 澤雲翔 ^か け | 化風舒 ^の ぶ |
| 嘉樂奏 | 文中聲 ^⑫ | 嘉樂奏せられ | 文あり聲 ^{また} に中る |
| 八音諧 ^⑬ | 神是聽 | 八音諧 ^{かな} い | 神是れ聽く |
| 咸潔齋 | 並芬芳 | 咸 ^み な潔齋し | 並びに芬芳あり |

烹牲[㊤] 享玉觴

牲を烹^にて 玉觴を享^すむ

神説饗 歆禋祀[㊤]

神 饗を説^よび 禋祀を歆^よぶ

祐大音 降繁祉[㊤]

大音を祐^け 繁祉を降^す

胙京邑 行四海

京邑に胙^{さいわい}し 四海に行く

保天年 窮地紀

天年を保^んじ 地紀を窮^めん

右天郊饗神歌

右は天郊饗神歌

天を祭る泰壇をととのえ、大いなる天の神をお祭りする。

精なる気がそれに感応して、あまたの精霊が来臨する。

紅い炎が積み重なるのは、香り高い柴を焼くかがり火。

紫のもやがたなびき、青空を覆わんばかり。

天の神の御本体は、かたちをもたないもの。

広々として限りなく、奥深くてさやけきもの。

天の神が到来されるときには、まばゆい光が一面を照らす。

耳を澄ませても聞こえず、目をこらしても兆しは見えない。

天の神が到着されると、みなこぞつて喜びいさむ。

靈妙あらたかでやわらぎ、わが心をうちふるえさせる。

天の神が座に着かれると、われらみな喜び樂しむ。

めぐみの雲が空を駆けめぐり、生き物をはぐくむ風がゆるやかに吹きわたる。

金石の雅楽が奏上され、文をそなえて楽の調べとかなないあう。

八種の音が和らいで整い、天の神がそれに耳を傾けられる。

みなが心身を洗い清め、かぐわしさが香り立つ。

犠牲を煮て、玉杯の神酒をお供えする。

天の神はお供えを喜ばれ、祭祀をお楽しみになる。

大いなる晋王朝に幸いをもたらし、多くの幸福を下してくださいさる。

幸いを都邑に下され、それはあまねく天下にわたりゆく。

天は永遠に安らかで、地は永久に続きゆかん。

右は天郊で神をもてなす歌。

○押韻 「神・賓・薪」は上平17「眞」、「雲」は上平20「文」。「形」は下平15「青」、「清」は下平14「清」。「照」は去声35「笑」、「兆」は上声30「小」。「歆・心」は下平21「侵」。「娛」は上平10「虞」、「舒」は上平9「魚」。「馨」は下平14「清」、「聽」は下平15「青」。「芳・鳩」は下平10「陽」。「祀・祉・紀」は上声6「止」、「海」は上声15「海」。

①泰壇 天の神をまつる祭壇。『礼記』祭法に「燔柴於泰壇、祭天也。瘞埋於泰折、祭地也。用騂・犢（壇折、封土爲祭處也。而國民保焉（能媚於神、故皇神相之。皇、大也。相、助也。）」

③精氣 万物を生み出す精霊の気。『周易』繫辭伝上に「精氣爲

②皇神 天の神をいう。『国語』楚語下に「若諸侯之好幣具、而物、游魂爲變。是故知鬼神之情狀、與天地相似。故不違（精氣

烟燼聚而成物、聚極則散而遊魂爲變也。」

④百靈 さまざまな神。班固「東都賦」に「於是薦三犧、效五牲、禮神祇、懷百靈。覲明堂、臨辟雍、揚緝熙、宣皇風。」

⑤象形 明確なかたちをとる。姿が見えること。『史記』樂書に「凡音由於人心、天之與人、有以相通、如景之象形、響之應聲。」
⑥曠無方 「曠」は広くて大きい。「無方」は際限のないこと。『周易』益に「天施地生、其益無方。」

⑦幽以清 「幽清」は深遠で清らか。張衡「靈憲」(『後漢書』天文志上注所引)に「太素之前、幽清玄靜、寂漠冥默、不可爲象、厥中惟虛、厥外惟無。」

⑧聽無聞 視無兆 視覚や聴覚でとらえられないこと。『老子』第十四章に「視之不見、名曰夷。聽之不聞、名曰希。」

⑨歆歆 喜ばしいさま。『欣欣』に通じる。『孟子』梁惠王下に「今王鼓樂於此、百姓聞王鐘鼓之聲、管籥之音、舉欣欣然有喜色而相告曰。」

⑩靈爽協 「靈爽」は不可思議で明らか。『漢書』郊祀志上に「民之精爽不貳、齊肅聰明者、神或降之(師古曰、爽、明也。齊讀

曰齋。齋肅、莊敬也)、在男曰覲、在女曰巫、使制神之處位、

爲之牲器。」袁宏『後漢紀』孝獻皇帝紀に「詔尚書郭浦喻汜曰、朕遭艱難、越在西都、感惟宗廟靈爽、何日不歎。天下未定、厥心不革。」協」は調和する。

⑪化風 万物の生長を助ける恵みの風。

⑫嘉樂 祭祀で用いる鐘や磬の音楽。『左傳』定公十年に「且犧・象不出門、嘉樂不野合。饗而既具、是棄禮也(犧・象、酒器、犧尊、象尊也。嘉樂、鍾磬也)。」

⑬中聲 ほどよい音と調和する。『左傳』昭公元年に「先王之樂、所以節百事也、故有五節(五聲之節)、遲速本末以相及、中聲以降。五降之後、不容彈矣(此謂先王之樂得中聲。聲成五降而息也。降罷退)。」

⑭八音 八種類の樂器。樂器の総称。『尚書』舜典に「二十有八載、帝乃殂落。百姓如喪考妣、三載、四海遏密八音(八音、金石絲竹匏土革木)。」

⑮牲性 いけにえ。「牲」は混じりけのない単色の牛。底本は「牲牲」に作るが、『晋書』樂志上により改めた。

⑯禮祀 煙を高く上げて天帝を祭る祭祀。『周礼』春官・大宗伯に「以禮祀昊天上帝、以實柴祀日月星辰(禮之言煙、周人尚

臭煙氣之臭聞者。」

⑰繁祉 多福。『毛詩』周頌・離に「燕及皇天、克昌厥後。綏我眉壽、介以繁祉」箋云、繁、多也。文王之德安及皇天、謂降瑞應無變異也。又能昌大其子孫、安助之以考壽與多福祿。」

⑱祚 「祚」に通じる。『晋書』樂志上は「祚」に作る。

本詩は天の神を降臨させる祭祀のうたである「郊祀歌十九章」〔漢書〕礼楽志に、句作り、内容とも範を取っている。たとえば「郊祀歌」の第一「練時日」は三字句を連ねていて「練時日、侯有望。炳簪蕭、延四方。九重開、靈之旂。垂惠恩、鴻祐休。靈之車、結玄雲。駕飛龍、羽旄紛。靈之下、若風馬。左

倉龍、右白虎。靈之來、神哉沛。先以雨、般裔裔。靈之至、慶陰陰。相放悲、震澹心。靈已坐、五音飭。虞至旦、承靈億。牲繭栗、棗盛香。尊桂酒、賓八鄉。靈安留、吟青黃。徧觀此、眺瑤堂。衆嬋並、綽奇麗。顏如茶、兆逐靡。被華文、廁霧縠。曳阿錫、佩珠玉。俠嘉夜、莒蘭芳。澹容與、獻嘉觴。」で、神の降臨に合わせて「靈之旂」「靈之下」「靈之來」「靈之至」「靈已坐」などとするのは明確に類似を見てとれよう。また同じく三字句が連なる第十五「華燭燭」には「神之旂」「神之出」「神之行」「神之徠」などの句が順次用いられていて、いっそうの類似性を見てとれる。

整泰折^① 俟皇祇 泰折を整え 皇祇を俟つ

衆神感 羣靈儀^② 衆神感じ 羣靈儀す

陰祀設^③ 吉禮施 陰祀設けられ 吉禮施さる

夜將極 時未移 夜は將に極まらんとし 時未だ移らず

祇之體 無形象 祇の體は 形象無し

潛泰幽 洞忽荒^④ 潛かに泰幽として 洞く忽荒たり

祇之出 菱若^⑤有
 靈無遠 天下母^⑥
 祇之來 遺光景^⑦
 照若存 終冥冥^⑧
 祇之至 舉欣欣^⑨
 舞象德 歌成文^⑩
 祇之坐 同歡豫
 澤雨施 化雲布
 樂八變^⑪ 聲教敷^⑫
 物咸享^⑬ 祇是娛
 齋既潔 侍者肅
 玉觴進 咸穆穆^⑭
 饗嘉參^⑮ 歆德馨^⑯
 胙有晉 暨羣生
 溢九壤^⑰ 格天庭^⑱
 保萬壽 延億齡
 右地郊饗神歌

祇の出ずるや 菱として有るが若し^{ごと}
 靈として遠きこと無く 天下の母たり
 祇の來たるや 光景を遺す^{ぞこ}
 照らすこと存するが若く 終に冥冥たり
 祇の至るや 舉げて欣欣たり
 舞は徳を象り^{かたど} 歌は文を成す
 祇の坐するや 同に歡び豫ぶ^{よろこ}
 澤雨施され 化雲布かる^し
 樂は八變し 聲教敷かる^し
 物咸な享け^み 祇は是れ娛しむ^{たの}
 齋は既に潔く 侍者は肅む^{つつし}
 玉觴進められ 咸な穆穆たり
 嘉參を饗け^う 徳の馨しきを歆ぶ^{よご}
 有晉に胙し^{さいわい} 羣生に暨ぶ^{およ}
 九壤に溢れ 天庭に格る^{いた}
 萬壽を保んじ 億齡を延ばさん
 右は地郊饗神歌

地を祭る泰折をととのえ、大いなる地の神の到来を待つ。

多くの神々が感応して、あまたの精霊が来臨して儀容を備えている。

地の神の祭壇が設置され、めでたき祭礼が執り行なわれる。

夜はたけなわになろうとするころおい、時はそこで止まったまま。

地の神の御本体は、かたちをもたないもの。

ひっそりと安らかで暗く、奥深くであるかなきか定かでない。

地の神がお出ましになると、ぼんやりとしてあたかもここにおられるかのよう。

しかとは見えぬ神のかたちちがすぐ近くに感じられ、まさに万物を生み出す母。

地の神が到来されるときには、光が照らす。

いますが如くあたりを照らし、ついには暗くなる。

地の神が到着されると、みなこぞって喜びいさむ。

徳をかたどった舞をおどり、文の徳をそなえた歌をうたう。

地の神が座に着かれると、みなともに喜び楽しむ。

めぐみの雨が万物に及び、万物をはぐくむ雲があたり一面をおおう。

音楽が八回演奏されて、威信と教化が敷き広げられる。

お供えの品をすべて受けて、地の神はそれを楽しまれる。

心身を洗い清め、そば付きの者は心つつしむ。

玉杯の神酒が献上され、みな穆穆としてうるわしい。

神はめでたきいけにえを受けて、天子のかくわしき徳をおよるこびになる。

神は晋王朝に幸いを下され、それは広く民衆に及びいたる。

下は九州のすべてにあふれ、上は天帝の宮廷に至る。

万年の長寿を安んじ、億年の長命を延ばさん。

右は地郊で神をもてなす歌。

○押韻 「祇・儀・施・移」は上平5「支」。「象」は上声36「養」、「荒」は去声42「宕」。「有」は上声44「有」、「母」は上声45「厚」。「景」は上声38「梗」、「冥」は下平15「青」。「欣」は上平21「欣」、「文」は上平20「文」。「豫」は去声9「御」、「布」は去声11「暮」。「敷・娛」は上平10「虞」。「肅・穆」は入声1「屋」。「馨・庭・齡」は下平15「青」、「生」は下平12「庚」。

①泰折 地の神を祭る祭壇。『礼記』祭法に「燔柴於泰壇、祭天也。瘞埋於泰折、祭地也。用騂・犢（壇折、封土爲祭處也）。」
「釋知遺形兮、超然自喪。寥廓忽荒兮、與道翱翔。」

孔穎達の疏によると、北郊に土盛をして繪と牲を埋めた。

②儀 来儀の意か。大鳥が降臨して威儀あること。瑞兆の一つ。
『尚書』益稷に「簠韶九成、鳳凰來儀（儀、有容儀。備樂九奏而致鳳皇、則餘鳥獸不待九而率舞）。」

③陰祀 地神の祭祀。『周礼』地官・牧人に「凡陽祀、用騂牲毛之。陰祀、用黝牲毛之（陰祀、祭地北郊及社稷也）。望祀、各

以其方之色牲毛之。」

④忽荒 混沌として未分化の状態。双声の語。賈誼「鵬鳥賦」に

⑤憂 暗くてはつきり見えないさま。司馬相如「大人賦」に「時

若憂憂將混濁兮、召屏翳誅風伯而刑雨師。」「毛詩」邶風・靜女に「憂而不見、搔首踟躕。」とある「憂」は「憂」と通じるか。

⑥靈無遠 天下母 「無遠」は遠く隔たつてはいない。『論語』

述而に「仁遠乎哉。我欲仁、斯仁至矣。」「天下母」は万物の根源。『老子』第二十五章に「有物混成、先天地生、寂兮寥兮、

獨立不改、周行而不殆、可以爲天下母。」産み出すことの神秘

性については、『毛詩』大雅・生民に「不圻不副、無苗無害。

以赫厥靈、上帝不寧。」

⑦遺光景 光が射す。「遺」はこのこす。張衡「思玄賦」に「離朱

脣而微笑兮、顔的礫以遺光（遺光言光彩射人也）」。

⑧冥冥 暗くて見えないさま。『毛詩』小雅・無將大車に「無將

大車、維塵冥冥。無思百憂、不出于頰（箋云、冥冥者蔽人目明

令無所見也。猶進舉小人蔽傷己之功德也。思衆小事以爲憂使人

蔽闇不得出於光明之道」。

⑨舉欣欣 みながよろこぶさま。『孟子』梁惠王下に「今王鼓樂

於此、百姓聞王鐘鼓之聲、管籥之音、舉欣欣然有喜色而相告曰。」

⑩成文 あやある美しさを完成させる。『荀子』樂論に「故樂者

審一以定和者也、比物以飾節者也、合奏以成文者也。」

⑪八變 音楽の演奏が終わったあと、さらに演奏が始まり、それ

が八回繰り返される。『周礼』春官・大司楽に「雲門之舞、冬

日至、於地上之闔丘奏之。若樂六變、則天神皆降、可得而禮矣。

咸池之舞、夏日至、於澤中之方丘奏之。若樂八變、則地示皆出、

可得而禮矣。」

⑫聲教 名声と教化。『尚書』禹貢に「東漸于海、西被于流沙、

朔南暨聲教、訖于四海。禹錫玄圭、告厥成功。」

⑬物咸亨 「校注」は「物咸亨」を『晋書』樂志上などにしたが

つて「物咸亨」に作るべきであるという。『周易』坤に「含弘

光大、品物咸亨。」とあり、万物が坤の徳によつて生長するの

意である。しかし、ここは地の神が祭祀を受ける場面であつて、

あえて地の徳を贊美する必要はないと考えて、底本のままにし

た。

⑭穆穆 天子の奥深いさま。ここは列席者のうやうやしいさまを

いうか。『毛詩』周頌・離に「相維辟公、天子穆穆。於薦廣牡、

相予肆祀（天子是時則穆穆然於進大牲、百辟與諸侯又助我陳

祭祀之饌、言得天下之歡心）」。

⑮饗嘉饗 底本は「饗嘉慶」に作るが、『晋書』樂志上により改

めた。また傅玄「晋宗廟歌十一篇」（『宋書』樂志二）の「祠廟

夕牲歌」に「嘉饗孔時、供茲享祀。」と「嘉饗」が見える。「饗」

は、動物を飼ひ養う。ここは犠牲のことをさすか。『礼記』樂

記に「夫豢豕爲酒、非以爲禘也。」

⑯德馨 善政を行なう徳がかぐわしい。『尚書』君陳に「我聞曰、

至治馨香、感于神明、黍稷非馨、明德惟馨。爾尚式時周公之獻

訓。」

①九壤 九土。中国全土。曹植「文帝誅」に「朱旗所勦、九壤披震。」

この歌も先の「天郊饗神歌」と同じく、「郊祀歌十九章」とくに第一「練時日」などの三言句から成る歌に基づく表現が多

②天庭 天界の庭。揚雄「甘泉賦」に「選巫咸兮叫帝闈、開天庭

い。

兮延羣神。」

經始明堂^① 享祀匪懈

明堂を經始し 享祀に懈るに匪^あず

於皇烈考^② 光配上帝^③

於^あ皇^あいなる烈考 光^{かが}かしく上帝に配せらる

赫赫上帝 既高既崇

赫赫たる上帝は 既に高く既に崇^{たか}し

聖考是配 明德顯融^④

聖考是れ配せられ 明德顯融す

率土敬職^⑤ 萬方來祭

率土 職に敬しみ 萬方 祭に來たる

常于時假^⑥ 保胙永世

常を時^この假^おいなるに于^おいて 胙^{さい}を永世に保んぜん

右明堂饗神歌

右は明堂饗神歌

始めて明堂を建て、祭祀に怠ることなくいそむ。

ああ大いなる光あふれる先考、かがやかしくも天帝と併せ祭る。

明るく光かがやく天帝は、高く高くそびえ立つ。

聖なる先帝を併せ祭り、そのすばらしい徳は明らかにかがやく。

天下はあまねく職務に勤しみ、万方よりその職を以て祭祀を助けに馳せ來たる。

常なる道をこの大いなる国において、とこしえに幸いを安んじ保たん。

右は明堂で神をもてなす歌。

○押韻 「懈」は去声15「卦」、「帝」は去声12「霽」。「崇・融」は上平1「東」。「祭・世」は去声13「祭」。

①經始 始めて計り建てる。『毛詩』大雅・靈台に「經始靈臺、

經之營之（箋云、文王應天命度始靈臺之基趾、營表其位。衆民

則築作不設期日而成之。）」

②烈考 功烈かがやかしい亡き父。文帝をさす。『毛詩』周頌・

離に「既右烈考、亦右文母（箋云、烈、光也。）」

③配上帝 「配」は合祭する。「上帝」は天帝。『周易』豫に「象

曰、雷出地奮、豫。先王以作樂崇德、殷薦之上帝、以配祖考。」

「天地郊明堂夕牲歌」注⑧参照。「配」を併せてまつる意に解

したが、先帝の徳が上帝に並ぶほど輝かしいものであるとの考

えがその根底にある。

④明德顯融 明らかな徳があまねく照らす。『三國志』呉書・陸

遜伝に「詔曰、朕以不徳、應期踐運、王塗未一、姦宄充路、夙

夜戰懼、不惶鑿寐。惟君天資聰叡、明德顯融、統任上將、匡國

弭難。」

⑤率土敬職 「率土」は率土の浜の略。天下すべて。『毛詩』小

雅・北山に「溥天之下、莫非王土、率土之濱、莫非王臣。」「敬

職」は謹んで職務を励行する。『孝經』聖治章に「昔者周公郊

祀后稷以配天、宗祀文王於明堂、以配上帝。是以四海之内、各

以其職來祭。」また明堂をうたった班固「兩都賦」の「明堂詩」

に「普天率土、各以其職。」

⑥常于時假 常なる道をこの大いなる国土に敷きひろめるの意。

「時」は「是」に通じる。「假」は「大」の意。『毛詩』周頌・

思文に「思文后稷、克配彼天。……無此疆爾界、陳常于時夏。」

同・周頌・離に「假哉皇考、綏予孝子（假、嘉也。）」

（金谷武志）

宋南郊雅樂登歌三篇

顏延之造

宋の南郊雅樂登歌三篇 顏延之造る

夤威寶命 嚴恭帝祖

夤うやうやしく寶命を威つしみ 嚴かに帝祖を恭うやまう

表海炳岱 系唐胄楚

海を表し岱かがやを炳かせ 唐を系ぎ楚を胄つぐ

靈鑑濬文 民屬劼武

靈は濬すくれたる文を鑑じ 民は劼れたる武に屬つく

奄受敷錫 宅中拓宇

奄いに受け敷あまねく錫たまい 中に宅おり宇を拓なく

亘地稱皇 罄天作主

地に亘りて皇を稱し 天を罄つくして主と作なる

月竈來賓 日際奉土

月の竈ほより賓を來たらしめ 日の際きわより土を奉ぜしむ

開元首正 禮交樂舉

元はじめめを開き正しきを首とし 禮は交わり樂は舉あぐ

六典聯事 九官列序

六典は事を聯ね 九官は序を列ぬ

有恡在滌 有潔在俎

恡有りて滌に在り 潔有りて俎に在り

以薦王衷 以答神祐

以て王の衷すを薦め 以て神の祐に答えん

右天地郊夕牲歌

右は天地郊の夕牲の歌

宋の南郊の雅樂の登歌三篇 顏延之の作

(宋王朝は) 宝である天命を敬い慎み、上帝と先祖とを崇め奉った。海と岱山とを目印とし、堯帝に繋がり漢の楚王を継いだ。

神は大いなる文を見そなわし、民はすぐれた武に付き従った。

おおいに（神より）受けあまねく（民に）与え、中央に居て土地を拓いた。
地の限り天の限りに、君主となった。

月の生まれる洞から使者が訪れ、日ののぼる果てから領土が献じられた。

正しきははじめを開けば、儀礼が交わされ音楽がおこる。

六つの司が力を合わせ、九つの官が順次に並ぶ。

いけにえは滌宮に在り、清められて供物台上に置かれる。

王のまゝころをささげもてなし、神のさいわいに答えるのだ。

右は天郊・地郊の祭祀前夜の歌

○押韻 「祖・土・祐」は上声10「姥」、「楚・擧・序・俎」は上声8「語」、「武・宇・主」は上声9「麋」。

①宋南郊雅樂登歌 『樂府詩集』卷一郊廟歌辭一「宋南郊登歌」

に「宋書樂志曰、文帝元嘉二十二年（四四五）、詔顏延之造天

地郊夕牲・迎送神・饗神雅樂登歌二篇。」所引は『宋書』樂志

一の「元嘉……二十二年、南郊、始設登哥、詔御史中丞顏延之

造哥詩、廟舞猶闕。」同・顏延之伝には「劉湛誅、起延之爲始

興王濬後軍諮議參軍、御史中丞。在任縱容、無所舉奏。遷國子

祭酒・司徒左長史。」元嘉二十二年は、顏延之六十二歳。注②

を参照。

「南郊」は、『宋書』武帝紀下に「永初元年（四二〇）夏六月

丁卯、設壇於南郊、卽皇帝位、柴燎告天。策曰『……饗茲景祚、

燔柴于南郊、受終于文祖。』「雅樂」は、『論語』陽貨に「惡紫

之奪朱也、惡鄭聲之亂雅樂也。」また『宋書』樂志一には、東

晋初期に「無雅樂器及伶人」であつた雅樂が、宋初までに次第

に整えられていくさまが記される。「登歌」は、『周礼』春官・

大師に「大師掌六律六同、以合陰陽之聲。……大祭祀、帥瞽登

歌、令奏擊拊」、鄭玄注に「鄭司農云、登歌、歌者在堂也。」

また『宋書』樂志一には、顔延之に至るまでの歴代の「登歌」の様相が記されている。

② **顔延之** 『宋書』本伝に、「顔延之、字延年、琅邪臨沂人也。

曾祖含、右光祿大夫。祖約、零陵太守。父顯、護軍司馬。……

孝建三年（四五六）、卒、時年七十三。」

③ **龔威寶命、嚴恭帝祖** 本篇と次篇は、李善注『文選』卷二七に

収められている。

「龔」は、つつしむこと。班固『漢書』叙伝下に「中宗明

明。龔用刑名。……丕顯祖烈、尚於有成。述宣紀第八」、顔師

古注に「鄧展曰、龔、敬也。」「龔」の仮借字である「寅」と本

文の「嚴恭」は、『尚書』無逸に「周公曰『嗚呼我聞。曰「昔

在殷王中宗、嚴恭寅畏、天命自度』」、偽孔伝に「言、太戊嚴恪

恭敬、畏天命用法度。」

「寶命」は、天が天子に降す天命。『尚書』金縢に「既克商

二年、王有疾弗豫。……周公……三壇同壇、因太王・王季・文

王、請命於天故。……史乃册祝曰『……嗚呼。無墜天之降寶命、

我先王亦永有依歸』」、偽孔伝に「歎惜武王。言、不救、則墜天

之寶命」、孔穎達疏に「神明當救助之、無得墮墜天之所下寶命。

天下寶命、謂使爲天子。」

④ **表海炳岱、系唐曹楚** 「海」「岱」は、『尚書』禹貢に「海岱及

淮、惟徐州」、偽孔伝に「東至海、北至岱、南及淮。」

「系唐」は、唐堯を継ぐこと。班固「東都賦」(『文選』卷

一)に「於是聖皇乃握乾符、闡坤珍(謂光武也)。……系唐統、

接漢緒(爾雅曰、系、繼也。)。『漢書』高帝紀下に「贊曰、…

…劉向……是以頌高祖云『漢帝本系、出自唐帝。』」

「曹楚」は、漢の楚王を継ぐこと。『漢書』楚元王交伝に「楚

元王交字游、高祖同父少弟也。』『宋書』武帝紀上に「高祖武皇

帝諱裕、……漢高帝弟楚元王交之後也。」

『文選』卷二七は本文の「表海炳岱」を「炳海表岱」に作

る。

⑤ **靈鑑潛文、民屬叡武** 「靈鑑」は、神靈のみそなわし。張華「女

史箴」(『文選』卷五六)に「勿謂幽昧、靈監無象。勿謂玄漠、

神聽無響。」

『文選』は本文を「靈監睿文、民屬睿武」に作る。

⑥ **奄受數錫、宅中拓宇** 「奄」は、大いに。『毛詩』大雅・皇矣

に「受祿無喪。奄有四方」、毛伝に「奄、大也。」

「數錫」は、広く与えること。『尚書』洪範に「惟十有三祀、王訪于箕子。……箕子乃言曰」……斂時五福、用數錫厥庶民」、偽孔伝に「斂是五福之道、以爲教、用布與衆民使慕之。」

「宅中」は、天地の中央に居ること。張衡「東京賦」(『文選』卷三)に「彼偏據而規小、豈如宅中而圖大」、薛綜注に「彼、謂秦也。據、依也。……豈如東京居天地之中、所圖者四海之外。」

「拓宇」は、領土を拓くこと。『後漢書』虞詡伝に「先帝開拓土宇、劬勞後定。而今憚小費、舉而弃之。」

⑦**亘地稱皇、罄天作主** 「亘地」は、地の端までわたること。班固「封燕然山銘」(『文選』卷五六)に「其辭曰、……竄其邈兮、亘地界」、李善注に「范曄後漢書曰、……竄憲……大破單于、遂登燕然山。刻石勒功、紀漢威德、令班固作銘。」

「稱皇」は、君主と称すること。『毛詩』周頌・桓に「於昭于天、皇以間之」、毛伝に「間、代也」、鄭箋に「皇、君也。……天以武王代之。」

⑧**月竈來賓、日際奉土** 「月竈」は、月の生ずる窟。揚雄「長楊賦」(『文選』卷九)に「西厭月窟、東震日域」、李善注に「服虔曰、窟、音窟、月所生也。善曰、何休公羊傳注曰、厭、服也。」

爾雅曰、震、懼也。日域、日出之域也。『漢書』揚雄伝下所收「長楊賦」の顔師古注には「服虔曰、窟、音窟、穴。月窟、月所生也。」

「來賓」は、『尚書』旅獒に「嗚呼。明王慎德、四夷咸賓」、偽孔伝に「言明王慎德、以懷遠。故四夷皆賓服。」

「奉土」は、領土をささげること。潘岳「爲賈謐作贈陸機」(『文選』卷二四)に「大晉統天、仁風遐揚。僞孫銜璧、奉土歸壇。」

⑨**開元首正、禮交樂舉** 「元」「正」は、元日。『尚書』舜典に「月正元日、舜格于文祖」、偽孔伝に「月正、正月。元日、上日也。舜服堯喪三年、畢將卽政、故復至文祖廟、告。」

「禮交」は、『礼記』礼器に「君西酌犧象、夫人東酌鬯尊。禮交動乎上、樂交應乎下。和之至也」、鄭玄注に「言交乃和。」

「樂舉」は、『礼記』曾子問に「孔子曰」……取婦之家、三日不舉樂。思嗣親也。」

⑩**六典聯事、九官列序** 「六典」は、治国のための六つの典範。『周礼』天官・大宰に「大宰之職、掌建邦之六典、以佐王治邦國。一曰治典、以經邦國、以治官府、以紀萬民。二曰教典、以

安邦國、以教官府、以擾萬民。三曰禮典、以和邦國、以統百官、以諧萬民。四曰政典、以平邦國、以正百官、以均萬民。五曰刑典、以詰邦國、以刑百官、以糾萬民。六曰事典、以富邦國、以任百官、以生萬民。」

「聯事」は、治政を協力しあうこと。『周礼』天官・小宰に「以官府之六、聯合邦治。一曰、祭祀之聯事。二曰、賓客之聯事。三曰、喪荒之聯事。四曰、軍旅之聯事。五曰、田役之聯事。六曰、斂弛之聯事。凡小事皆有聯。」

「九官」は、『漢書』劉向伝に「乃上封事諫曰『……臣聞舜命九官、濟濟相讓、和之至也』」、顔師古注に「尚書、禹作司空、棄后稷、契司徒、咎繇作士、垂共工、(作)〔益〕朕虞、伯夷秩宗、夔典樂、龍納言、凡九官也。」

⑪**有牲在滌、有潔在俎** 「牲」は、体の完全ないけにえ。『尚書』微子に「今殷民、乃攘竊神祇之犧牲用」、偽孔伝に「自來而取曰攘。色純曰犧。體完曰牲。牛羊豕曰牲。器實曰用。」

「滌」は、天神にささげるいけにえのみを住まわせて清める宮。『礼記』郊特性に「帝牛、必在滌三月。稷牛、唯具。所以別事天神與人鬼也」、鄭玄注に「滌、牢中所搜除處也。唯具、

遭時又選可用也。」

「俎」は供物台。「有潔在俎」は、『毛詩』小雅・楚茨に「絜爾牛羊、以往烝嘗、或剝或亨、或肆或將。執爨踏踏、爲俎孔碩」、毛伝に「飪之也。肆、陳。將、齊也」、鄭箋に「祭祀之禮、各有其事。有解剝其皮者、有炙熟之者、……皆從獻之俎也。」

⑫**以薦王衷、以答神祐** 「薦」は、献上すること。『左伝』昭公十五年に「文伯揖籍談(文伯無辭。揖籍談、使對)對曰『諸侯之封也、皆受明器於王室(謂明德之分器)、以鎮撫其社稷。故能薦彝器於王(薦、獻也)。』」

「祐」は、天からの幸い。『毛詩』小雅・桑扈に「君子樂胥。受天之祐」、毛伝に「胥、皆也」、鄭箋に「祐、福也。……天子之以福祿。」「神祐」は、『漢書』揚雄伝下所収「長楊賦」に「掉八列之舞。酌允鑠、肴樂胥。聽廟中之雍雍、受神人之福祐。」百納本『宋書』は「王衷」を「王哀」に作るが、伝写の際の訛字か。『文選』李善注本は「以饗王衷」に作る。

⑬**右天地郊夕牲歌** 「天地郊」は、『宋書』礼志三に「景初元年(二三七)十月乙卯、始營洛陽南委粟山爲圓丘。詔曰『……天郊所祭、曰皇天之神、以太祖武帝配。地郊所祭、曰皇地之祇、

以武宣皇后配。……』……宋武帝永初三年（四二二）九月、司空羨之・尚書令亮等奏曰『……高祖武皇帝宜配天郊……至於地祇之配、雖禮無明文、先代舊章、每所因循、魏晉故典、足爲前式。謂武敬皇后宜配北郊。……』詔可。」

「夕牲」は傅玄「祠天地五郊夕牲歌」に既出。『漢書』丙吉伝に「子顯……嘗從祠高廟、至夕牲日、乃使出取齋衣」、顔師古注に「未祭一日、其夕展視牲具、謂之夕牲。」「後漢書」禮儀

志上に「正月、天郊、夕牲」、劉昭注に「周禮、展牲。干寶曰、若今夕牲。又郊儀、先郊日未晡五刻夕牲、公卿京尹衆官悉至壇東就位、太祝史牽牲入、到榜、廩犧令跪曰、請省牲。」「宋書」禮志一に「南郊、皇帝散齋七日、致齋三日。官掌清者亦如之。致齋之朝、御太極殿幄坐。著絳紗袍、黑介幘、通天金博山冠。先郊日未晡五刻、夕牲。公卿京兆尹衆官悉壇東就位、太祝史牽牲入。」

維聖饗帝 維孝饗親^①
皇乎備矣 有事上春^②
禮行宗祀 敬達郊禋^③
金枝中樹 廣樂四陳^④
陟配在京 降德在民^⑤
奔精照夜 高燎煬晨^⑥
陰明浮爍 沈禁深淪^⑦
告成大報 受釐元神^⑧
月御按節 星驅扶輪^⑨
遙興遠駕 燿燿振振^⑩

維れ聖のみ帝を饗し 維れ孝のみ親を饗す
皇いなるかな備われり 上春に事うる有り
禮は宗祀に行い 敬は郊禋に達す
金枝は中に樹ち 廣樂は四もに陳ぶ
配を陟^{たか}くして京に在り 徳を降して民に在り
奔る精は夜に照り 高き燎は晨に煬ぐ
陰明は浮かび爍き 沈禁は深く淪む
成るを告げて大いに報じ 釐^{さいわ}いを元神より受けん
月の御は節を按^{おさ}え 星の驅りは輪を扶く
遙かに興し遠く駕し 燿燿たり振振たり

右天地郊迎送神歌

右は天地郊の神を迎送する歌

聖人だけが上帝をもてなし、孝行者のみが親をもてなす。

ああすべてが備わり、初春に（祭りに）従事する。

礼は先祖のまつりにて行われ、敬は天と六宗のまつりにて達する。

金の枝が中央に立ち、広楽の音楽が四方に連なる。

上（天）なる先祖に配するのは都において、下まで徳を及ぼすのは民において。

奔る星が夜を照らし、高きかがり火が朝まで燃える。

（北水の星である）陰明は浮かび輝き、（川沢を祭る）「沈」と（日月星辰山川を祭る）「祭」は深く沈む。

成就をあまねく報じて、幸いを大いなる神より受けよう。

月の御者は轡を抑え、星の疾駆は車輪をたすける。

はるかに発ち遠く馳せ、ぴかぴかごろごろ。

右は天郊・地郊で神を送迎する歌

○押韻 「親・禋・陳・民・晨・神・振」は上平17「眞」、「春・淪・輪」は上平18「諄」。

①維聖饗帝、維孝饗親 「饗帝」「饗親」は、『礼記』祭義に「唯也。」

（聖人爲能饗帝、孝子爲能饗親 謂祭之、能使之饗也。帝、天也。）

②皇乎備矣、有事上春 「備矣」は、『漢書』礼楽志所収「安世

饗者、郷也。郷之、然後能饗焉（言中心郷之、乃能使其祭見饗

房中歌」に「大孝備矣、休德昭清。高張四縣、樂充宮庭。」

「有事」は、『左伝』僖公九年に「王使宰孔賜齊侯胙、曰『天子有事于文武（有祭事也）』。使孔賜伯舅胙（天子謂異姓諸侯、曰伯舅）。』」

「上春」は、『周礼』天官・内宰に「上春、詔王后、帥六宮之人、而生種稷之種、而獻之于王」、賈公彥疏に「上春者、亦謂正歲。以其春事將興、故云上春也。』『周礼』春官・天府に「上春、鬯寶鎮及寶器」、鄭玄注に「上春、孟春也。』」

③ **禮行宗祀、敬達郊禋** 「禮行」は、『礼記』礼運に「故禮行於郊、而百神受職焉。禮行於社、而百貨可極焉。禮行於祖廟、而孝慈服焉。禮行於五祀、而正法則焉」、鄭玄注に「言、信得其禮、則神物與人、皆應之。』」

「宗祀」は、『孝経』聖治章に「昔者、周公郊祀后稷、以配天。宗祀文王於明堂、以配上帝」、御注に「明堂、天子布政之宮也。周公、因祀五方上帝於明堂、乃尊文王、以配之也。』」

「禋」は、『尚書』舜典に「正月上日、受終于文祖。……禋于六宗。望于山川、徧于羣神」、偽孔伝に「精意以享、謂之禋」、陸德明音義に「禋、音因。王云、絜祀也。馬云、精意以享也。』」

④ **金枝中樹、廣樂四陳** 「金枝」は、『漢書』礼樂志所収「安世

房中歌」に「金支秀華、庶旄翠旌」、顏師古注に「張晏曰、金支、百二十支。秀華、中主有華豔也。……臣瓚曰、……以黃金爲支、其首敷散、若草木之秀華也。師古曰、金支秀華、瓚說是也。』」

「廣樂」は、『史記』趙世家に、重病だつた趙簡子が目覺めたとときの言葉として「我之帝所甚樂、與百神游於鈞天、廣樂九奏萬舞、不類三代之樂、其聲動人心。』」

⑤ **陟配在京、降德在民** 「陟配」は、『尚書』君奭に「周公若曰『……我聞、在昔成湯既受命、時則有若伊尹、格于皇天。……在武丁、時則有若甘盤、率惟兹有陳、保乂有殷。故殷禮陟配天、多歷年所』」、偽孔伝に「言、伊尹至甘盤六臣、佐其君、循惟此道、有陳列之功、以安治有殷。故殷禮能升配天、享國久長、多歷年。』」

「在京」は、『毛詩』大雅・下武に「三后在天、王配于京」、毛伝に「三后、大王・王季・文王也。王、武王也」、鄭箋に「此三后既沒登遐、精氣在天矣。武王又能配行其道於京、謂鎬京也。』」

「降德」は、『礼記』内則に「后王命冢宰、降德于衆兆民」、鄭玄注に「后、君也。德、猶教也。』」

⑥ 奔精照夜、高燎燔臠

「奔精」は、李善注に「奔精、星流也」とあり、流星。『史記』樂書に「漢家常以正月上辛、祠太一甘泉。以昏時夜祠、到明而終。常有流星、經於祠壇上。」

「高燎燔臠」は、張衡「東京賦」(『文選』卷三)に「及將祀天郊、報地功。……颺標燎之炎燭、致高煙乎太一」、薛綜注に「颺、飛颺也。標之言聚也。謂聚薪焚之、揚其光炎、使上達於天也。」

『文選』李善注は本文の「照夜」を「昭夜」に作る。

⑦ 陰明浮爍、沈爍深淪

「陰明」は、李善注に「言宋爲水德而主辰、故陰明之宿、浮爍而揚光」とあり、宋朝の水徳をつかさどる星。『史記』天官書に「察日辰之會、以治辰星之位。曰北方水、太陰之精、主冬、日壬・癸。」

「沈」「祭」は、祭祀の名。「沈」は、『周礼』春官・大宗伯に「以狸沈祭山林川澤」、鄭玄注に「祭山林曰埋、川澤曰沈。」

「祭」は、『周礼』春官・大祝に「掌六祈、以同鬼神示。一曰類。二曰造。三曰禴。四曰祭。五曰攻。六曰說」、鄭玄注に「祈、鳴也。謂爲有災變、號呼告于神、以求福。天神人鬼地祇不和、則六癘作見。故以祈禮、同之。……鄭司農云、類・造・

禴・祭・攻・說、皆祭名也。……祭、日月星辰山川之祭也。」さ

らに『左伝』昭公元年に「晉侯有疾。鄭伯使公孫僑如晉聘、且問疾。叔向問焉、曰『寡君之疾病、卜人曰「實沈臺駘、爲祟」。

史莫之知。敢問此何神也』。子産曰『……則實沈、參神也。……則臺駘、汾神也。抑此二者、不及君身。山川之神、則水旱癘疫之災、於是乎祭之。日月星辰之神、則雪霜風雨之不時、於是乎祭之』、杜預注に「有水旱之災、則祭祭山川之神、若臺駘者。星辰之神、若實沈者。」

⑧ 告成大報、受釐元神

「告成」は、天に諸侯の功を告げること。『礼記』礼器に「是故昔先王尚有德、尊有道、任有能、舉賢而置之、聚衆而誓之。是故因天事天、因地事地。因名山、升中于天」、鄭玄注に「中、猶成也。謂巡守至於方獄、燔柴祭天、告以諸侯之成功也。」

「大報」は、あまねく天に報じること。『礼記』郊特牲に「郊之祭也、迎長日之至也。大報天而主日也」、鄭玄注に「大、猶徧也。天之神、日爲尊」、孔穎達疏に「……又徧報天之一切神。而天之諸神、唯日爲尊。故此祭者、日爲諸神之主。故云主日也。」

「受釐」は、ひもろぎの御下がりを受くこと。神の幸いを

受ける。『漢書』賈誼伝に「後歲餘、文帝思誼、徵之。至、入見、上方受釐、坐宣室。上因感鬼神事、而問鬼神之本」、顏師古注に「蘇林曰、宣室、未央前正室也。應劭曰、釐、祭餘肉也。漢儀注祭天地五時、皇帝不自行、祠還致福。釐音禱。師古曰、禱、福也。借釐字爲之耳。言受神之福也。」

「釐」は、揚雄「甘泉賦」(『文選』卷七)に「感動天地、逆釐三神者」、李善注に「服虔曰、釐、福也。」「漢書」揚雄伝上所収「甘泉賦」には服虔注の引用がない。

⑨月御按節、星驅扶輪

「月御」と「按節」は、司馬相如「子虛賦」(『文選』卷七)に「陽子參參乘、熾阿爲御(郭璞曰、熾阿、古之善御者、見楚辭。熾、音織。善曰、楚辭曰、熾阿不御焉。案節未舒、即陵狡獸(司馬彪曰、案節、行得節。……善曰、天文志曰、案節徐行。服虔曰、謂行遲也。)、現行「楚辭」に「熾阿不御」は見当たらず、「離騷」に「前望舒使先驅兮、後飛廉使奔屬」、王逸注に「望舒、月御也。月體光明、以喻臣清白也。」

營泰時 定天衷^①
泰時を營み 天衷を定む
思心叡 謀筮從^②
思心は叡れ^③ 謀筮は從う

李善所引の「天文志」は高步瀛著、曹道衡・沈玉成点校『文選李注義疏』(中華書局、一九八五)卷七に「案、《天文志》無「案節徐行」之文、疑因若月失節而妄行而誤記引之。」

「扶輪」は、曹丕「芙蓉池作」(『文選』卷二二)に「驚風扶輪轂、飛鳥翔我前」、李善注に「張衡羽獵賦曰、風翊翊其扶輪。」

⑩遙興遠駕、耀耀振振

「耀耀振振」は、『漢書』礼樂志所収「安世房中歌」に「靄震震、電耀耀。明德鄉、治本約」、顏師古注に「言王者之威、取象靄電、明示德義之方、而治政本之約。約讀曰要。」

「振振」は、『左伝』僖公五年に「八月甲午、晉侯圍上陽(上陽、虢國都)、問於卜偃曰「吾其濟乎。」「對曰「克之。」「公曰「何時。」「對曰「童謠云「丙之晨。龍尾伏辰。均服振振。取虢之旂(戎事、上下同服。振振、盛貌。旂、軍之旌旗)。」」
『文選』は、本文の「耀耀」を「曜曜」に作る。

建表竊 設郊宮^③
 田燭置 權火通^④
 曆元旬 律首吉^⑤
 飾紫壇 坎列室^⑥
 中星兆 六宗秩^⑦
 乾宇晏 地區謚^⑧
 大孝昭 祭禮供
 牲日展 盛自躬^⑨
 具陳器 備禮容^⑩
 形舞綴 被歌鐘^⑪
 望帝閣 聳神蹕^⑫
 靈之來 辰光溢^⑬
 潔粢酌 娛太一^⑭
 明輝夜 華哲日
 裸既始 獻又終^⑮
 煙薌鬯 報清穹^⑯
 饗宋德 胙王功^⑰
 休命永 福履充^⑱

表竊を建て 郊宮を設く
 田燭は置かれ 權火は通ず
 曆元は旬^{あまね}く 律首は吉^{よろ}し
 紫壇を飾り 列室を坎^{むろ}す
 中星は兆^{あらわ}れ 六宗は秩^{つち}なる
 乾宇は晏^{やす}らかに 地區は謚^{しず}かなり
 大孝は昭らかに 祭禮は供わる
 牲は日びに展べ 盛は自ら躬^こらす
 陳器を具え 禮容を備^まう
 舞綴に形わし 歌鐘に被^こらす
 帝閣を望めば 神蹕を聳^こやかす
 靈の來たるや 辰光 溢る
 粢酌を潔め 太一を娛^{あそ}びましむ
 明は夜に輝き 華は日に^{あきら}け
 裸は既に始まり 獻も又た終る
 薌鬯を煙らせ 清穹に報^{こた}はず
 宋の德に饗^{むか}い 王の功を胙^こぐ
 休命は永く 福履は充たん

右天地饗神歌

右は天地に神を饗する歌

祭りの壇を造り、天地の中心を定める。

思慮は優れ、卜筮に従う。

目印の茅を建て、祭りの宮を設ける。

田の灯りが置かれ、かがり火が導く。

暦の正しき始まりがゆきわたり、律の始まりはめでたい。

紫の祭壇を飾り、列なるむろを窪ませる。

なかつ星があらわれ、六柱の神々がならぶ。

天空は安らか、大地は静か。

大いなる孝は明らかで、祭礼がすべて整う。

いけにえは日ましに多く、お供物はみずからの手で。

楽器をすべて並べ、礼の形をすべて備える。

舞踏にあらわし、歌や鐘に奏でる。

天帝の門を望めば、神の先払いが聳え立つ。

神霊の光臨に、星の光が溢れる。

穀物と酒を清め、太一神を喜ばせる。

明るさが夜に輝き、華やぎは昼にあきらか。

(酒を地に注ぐ)「裸」が始まつてしまい、(肉を捧げる)「献」も終わる。
穀物の香と酒の香をくゆらせ、清き天に報ずる。

(神々も) 宋の徳に心を寄せ、王の功をことほぐ。

「良き天命はとこしえに、福運が満ちるように」と。

右は天郊・地郊で神をもてなす歌

○押韻 「表・宮・通」は上平1「東」、「従」は上平3「鍾」。「吉・室・秩・謚」は入声5「質」。「供・容・鐘」は上平3「鍾」、「躬」は上平1「東」。「蹕・溢・一・日」は入声5「質」。「終・穹・功・充」は上平1「東」。

①營泰時、定天衷 「泰時」は、神を祭る庭。『史記』孝武本紀に「十一月辛巳朔旦冬至、昧爽、天子始郊拜泰一。……太史公・祠官寬舒等曰『神靈之休、祐福兆祥、宜因此地光域、立泰時壇以明應。』」

「天衷」は、天の中心。顔延之「三月三日曲水詩序」(『文選』卷四六)に「然其宅天衷、立民極」、李善注に「東京賦曰、豈如宅中而圖大。呂氏春秋曰、古之王者、擇天之中而立國、擇國之中而立宮。周禮曰、設官分職、以爲民極。」

②思心觀、謀筮從 「心觀」は、顔延之「車駕幸京口侍游蒜山作」

『文選』卷三三)に「睿思纏故里、巡駕匝舊垆。」

「謀筮」は、左思「魏都賦」(『文選』卷六)に「爰初自臻、言占其良。謀龜謀筮、亦既允臧」、張載注に「謀龜謀筮、猶周公之下都洛邑也」、李善注に「尚書曰、謀及卜筮。」「尚書」洪範に「汝則有大疑、謀及乃心、謀及卿士、謀及庶人、謀及卜筮。」

③建表纒、設郊宮 「表纒」は、束ねた茅で位置を示すもの。『說文』艸部・蔹に「朝會束茅表位曰纒。从艸絕聲。春秋國語曰、致茅纒、表坐。」「國語」晋語八に「叔向謂趙文子曰『……昔成王盟諸侯于岐陽(岐山之陽)。楚爲荊蠻(荊州之蠻)、置茅纒、設望表、與鮮卑守燎。故不與盟(置、立也。纒、謂束茅而立之、所以縮酒。)」

「郊宮」は、天地を祭る宮。『漢書』終軍伝に「軍上對曰」：「陛下……專神明之敬、奉燔瘞於郊宮」、顏師古注に「燔、祭天也。瘞、祭地也。……郊宮、謂泰時及后土也。」

④ **田燭置、權火通** 「田燭」は、田の端に置く灯火。『礼記』郊特性に「祭之日、……汜埽反道、鄉爲田燭」、鄭玄注に「謂郊道之民、爲之也。反道、割令新土在上也。田燭、田首爲燭也」、孔穎達疏に「鄭氏曰、鄉者鄉、謂郊内六鄉也。六鄉之民、各於田首、設燭照路、恐王祭郊之早。」

「權火通」は、烽火が祀りの場に届くよう配すること。『史記』封禪書に「秦以冬十月爲歲首、故常以十月上宿郊見（『集解』李奇曰、宿猶齋戒也）、通權火（『集解』張晏曰、權火、烽火也。狀若井絜舉矣。其法類稱、故謂之權。欲令光明遠照通祀所也。漢祠五時於雍、五里一烽火。）」

⑤ **曆元旬、律首吉** 「曆元」は、曆の基準となるはじめ。『後漢書』律曆志中に「靈帝熹平四年、五官郎中馮光・沛相上計掾陳晃言『曆元不正、故妖民叛寇益州、盜賊相續爲（害）。曆（當）用甲寅爲元而用庚申、……』……議郎蔡邕議、以爲『……案曆法、黃帝・顓頊・夏・殷・周・魯凡六家、各自有元。光・晃所

據、則殷曆元也。』『宋書』律曆志中にも同じ記事がある。

「旬」は、『毛詩』大雅・江漢に「王命召虎、來旬來宣」、毛伝に「旬、徧也」、鄭箋に「旬、當作營。宣、徧也」とあり、毛伝では「ゆきわたらせる」、鄭箋では「いとなむ」。

「律」は、『呂氏春秋』孟春紀以下等にある、曆の各月に配当される十二律を指すだろう。仲冬紀には「仲冬之月、……其音羽、律中黃鐘。」

⑥ **飾紫壇、坎列室** 「紫壇」は、『漢書』礼樂志所収「郊祀歌」に「爰熙紫壇、思求厥路」、顏師古注に「熙、興也。紫壇、壇紫色也。思求降神之路也。」

「坎」は、土盛りする「壇」とは逆に、地を窪ませる祭りの場。『礼記』祭法に「相近於坎壇、祭寒暑也。……四坎壇、祭四方也」、鄭玄注に「相近、當爲禳祈。聲之誤也。禳、猶卻也。祈、求也。寒暑不時、則或禳之、或祈之。寒於坎、暑於壇。……祭山林丘陵於壇、川谷於坎。每方各爲坎、爲壇。」「礼記」祭義に「祭日於壇、祭月於坎。以別幽明、以制上下」、孔穎達疏に「祭日於壇、謂春分也。祭月於坎、謂秋分也。月爲幽、日爲明、日在壇、月在坎。」

⑦ **中星兆、六宗秩** 「中星」は、中央の星。『尚書』堯典に「日

若稽古帝堯曰『……乃命羲和、欽若昊天、曆象日月星辰、敬授人時』、偽孔伝に「昊天、言元氣廣大。星、四方中星」、孔穎

達疏に「四方中星者、二十八宿、布在四方、隨天轉運、更互在南方、毎月各有中者。月令、毎月昏旦、惟舉一星之中。若使毎日視之、即諸宿、毎日昏旦、莫不常中。中則人皆見之。故以中星表宿、四方中星、摠謂二十八宿也。」

「六宗」は、六つの尊ぶべき対象。「六」の内実は諸説あり、『尚書』舜典（前作の注③に既出）、その偽孔伝、陸徳明音義、孔穎達疏を参照されたい。

⑧ **乾宇晏、地區謚** 「乾宇」「地區」は、蔡邕「胡公碑」に「煥文徳、伊朝后。……亘地區、充天宇。」

⑨ **牲日展、盛自躬** 「盛」は、穀物を器に盛ったお供え。『左伝』桓公六年に「公（隨侯）曰『吾牲牲肥腍、黍盛豐備。何則不信』、杜預注に「黍稷曰黍、在器曰盛。」

⑩ **具陳器、備禮容** 「陳器」は、具体的には樂縣。『穀梁伝』定公四年に「吳入楚。……壞宗廟、徙陳器、撻平王之墓、范寧注に「鄭嗣曰、陳器、樂縣也。……言吳人壞楚宗廟、徙其樂器、

鞭其君之尸。」

「禮容」は、『史記』孔子世家に「孔子爲兒嬉戲、常陳俎豆、設禮容。」

⑪ **形舞綴、被歌鐘** 「舞綴」の「綴」は、舞人たちの間の空間。

『礼記』樂記に「故天子之爲樂也、以賞諸侯之有德者也。……故其治民勞者、其舞行綴遠。其治民逸者、其舞行綴短」、鄭玄注に「民勞則徳薄、鄼相去遠、舞人少也。民逸則徳盛、鄼相去近、舞人多也」、孔穎達疏に「綴、謂鄼也。遠、是舞者外營域行列之處。……鄼、謂鄼聚舞人行位之處。立表鄼、以識之。」

「歌鐘」は、『左伝』襄公十一年に「鄭人賂晉侯、……歌鐘二肆」、孔穎達疏に「言歌鐘者、歌必先金奏、故鐘以歌名之。晉語孔晁注云、歌鐘、鐘以節歌也。」

⑫ **望帝闈、聳神譚** 「帝闈」は、天帝の門番。『楚辭』離騷に「吾令帝闈開闈兮、倚闈闈而望予」、王逸注に「帝、謂天帝。闈、主門者也。」

⑬ **靈之來、辰光溢** 『楚辭』九歌・湘夫人に「九嶷嶺兮並迎、靈之來兮如雲」、王逸注に「言、舜使九嶷之山神、續然來迎二女、則百神侍送、衆多如雲。」

⑭ **潔粢酌、娛太一** 「粢」は、お供えの穀物。『楚辭』招魂に「稻

粢稱麥、粃黃梁些」、王逸注に「稻、稌。粢、稷。稱、擇也。

擇麥中先熟者也。」

「潔粢」は、『左伝』桓公六年に「少師……對曰『夫民、神

之主也。是以聖王先成民、而後致力於神。故奉盛、以告曰、粢

粢豐盛。謂其三時不害、而民和年豐也。』

「娛太一」は、『楚辭』九歌・東皇太一に「吉日兮辰良、穆

將愉兮上皇」、王逸注に「穆、敬也。愉、樂也。上皇、謂東皇

太一也。」

⑮ **裸既始、獻又終** 「裸」「獻」は、『周礼』天官・内宰に「大祭

祀、后裸獻則贊」、鄭玄注に「謂祭宗廟、王既裸而出迎牲、后

乃從後裸也。…獻、謂王薦腥薦孰、后亦從後獻也。」

⑯ **煙薺鬯、報清穹** 「薺」は、香りある穀物。『礼記』曲礼下に

「凡祭宗廟之禮、牛曰一元大武、豕曰剛鬣、…黍曰薺合、梁

曰薺其」、鄭玄注に「其、辭也」、孔穎達疏に「夫穀秬者曰黍、

秬既軟而相合、氣息又香、故曰薺合也」、陸徳明音義に「梁謂

白梁黃梁也。其、語助也。」

「鬯」は、香り高い酒。黒キビを醸して作る。『礼記』曲礼

下に「凡摯、天子鬯、諸侯圭、卿羔大夫鴈、…」、鄭玄注に

「摯之言、至也。天子無客禮、以鬯爲摯者、所以唯用告神爲至

也」、陸徳明音義に「摯、音至。…鬯、勅亮反、香酒」、孔穎

達疏に「天子鬯者、釀黑黍爲酒。其氣芬芳調暢、故因謂爲鬯也。」

「清穹」は、清い天空。謝瞻「九日從宋公戲馬臺集送孔令

詩」(『文選』卷二〇)に「輕霞貫日月、迅商薄清穹」、李善注

に「爾雅曰、穹、蒼蒼、天也」、**爾雅**「秋天に「穹、蒼蒼、天

也。春爲蒼天、夏爲昊天、秋爲旻天、冬爲上天。」

⑰ **饗宋德、胙王功** 「饗徳」は、徳に帰すこと。『礼記』礼器に

「故君子有禮、則外諧而内無怨。故物無不懷仁、鬼神饗徳」、

鄭玄注に「懷、歸也。」

「胙」は「祚」の仮借字。「王功」は、『周礼』夏官・司勳

に「王功曰勳(輔成王業、若周公)、國功曰功(保全國家、若

伊尹)、民功曰庸(法施於民、若后稷)、事功曰勞(以勞定國、

若禹)。」

⑱ **休命永、福履充** 「休命」は、天のよき命。『易』大有に「象

曰、火在天上、大有君子、以遏惡揚善、順天休命」、王弼注に

「大有、包容之象也。故遏惡揚善、成物之性、順天休命、順物

之命。』『尚書』説命下に「説拜稽首曰『敢對揚天子之休命』、
偽孔伝に「對、答也。答受美命而稱揚之。」

「福履」は、福祿。『毛詩』周南・樛木に「樂只君子、福履
綏之」、毛伝に「履、祿。綏、安也。」

(佐竹保子)

宋明堂歌^① 謝莊造 宋の明堂歌 謝莊造る

地紐謐^③ 乾樞回^④ 地紐^{しず} 謐かに 乾樞 回る

華蓋動^⑤ 紫微開^⑥ 華蓋 動きて 紫微 開く

旌蔽日 車若雲 旌は日を蔽い^{おほ} 車は雲の若し

駕六氣^⑦ 乘網緼^⑧ 六氣に駕し 網緼に乗ず

擘帝京 輝天邑 帝京を擘^{かぎ}かし 天邑を輝かし

聖祖降 五靈集 聖祖 降り 五靈 集まる

構瑤彤^⑩ 聳珠簾 瑤彤 構えられ 珠簾 聳^{そはだ}つ

漢拂幌 月棲檐 漢は幌を拂い 月は檐に棲む

舞綴暢^⑪ 鐘石融^⑫ 舞綴^の暢^び 鐘石 融^{やわら}ぐ

駐飛景^⑬ 鬱行風 飛景を駐め 行風を鬱^{おさ}たらしむ

懋棗盛^⑭ 潔性恮^⑮ 棗盛を懋^{さかん}にし 性恮^を潔^{きよ}くす

百禮肅 羣司虔 百禮 肅たり 羣司 虔たり

皇德遠 大孝昌 皇德は遠^{ふか}く 大孝は昌^{さか}んなり

貫九幽^⑥ 洞三光^⑦

九幽を貫き 三光を洞く^⑧

神之安 解玉鑾^⑨

神は之れ安んじて 玉鑾を解く

景福^⑩至 萬宇歡^⑪

景福至りて 萬宇歡ぶ

右迎神歌詩

右は神を迎うる歌詩

依漢郊祀迎神 三言 四句一轉韻^⑫

漢の郊祀迎神に依り 三言 四句に一たび轉韻す

宋の明堂歌 謝莊の作

大地をつなぎとめる綱は安らかに、天の中軸は回転する。

その天界で、帝王を乗せた車を覆う傘が動き、御所の紫微宮が門を開いた。

一行の旗旗は日を蔽い隠し、車は雲のように連なる。

天地の間に変化しつつ生起する六つの気を操り、陰陽が働きかけ合う勢い盛んな気に乗じて行く。

帝都を盛大に輝かし、天子の直轄地を光に包みつつ、

聖祖が降臨すると、青帝・赤帝・黄帝・白帝・黒帝の五帝が集まってきた。

お迎えする明堂には、玉作りの石段が構えられ、珠を綴り合せた簾が高く掲げられている。

天の川は窓辺のとばりを払って流れ、月は檐^{ひさし}の上に憩う。

舞踊の隊列がのびやかに広がり、鐘や磬の音が和やかに響き合う。

そこでは、日の光もその飛行をしばし止め、流れゆく風も吹き溜まる。

神前に捧げる穀物を器に盛り上げ、完全に整えられたいけにえの動物を清める。

諸々の儀式が肅然と執り行われ、居並ぶ百官は敬虔な面持ちでこれに臨む。

皇帝の恩徳は深遠で、大いなる孝は明々と輝く。

それは、奥深い地下世界にまつすぐ通じ、日月星の三光を貫くものだ。

神靈は安らいで、その御車につけられた鈴を解く。

すると、そこに大いなる福が到来して、天下の万民が歓喜する。

右は神を迎える歌辞

郊祀において神を迎える漢代の歌辞に依拠して、三言で、四句ごとに換韻する。

○押韻 「回」は上平15 「灰」、「開」は上平16 「哈」。「雲・縊」は上平20 「文」。「邑・集」は入声26 「緝」。「簾・檐」は下平24 「鹽」。

「融・風」は上平1 「東」。「怪・虔」は下平2 「仙」。「昌」は下平10 「陽」、「光」は下平11 「唐」。「鑾・歡」は上平26 「桓」。

①明堂 帝王が政教を行う建物。ここでは帝王の靈魂を迎える祭壇をいう。『礼記』明堂位に「大廟、天子明堂。」前掲の傳玄「前

③地紐 大地を天につなぎとめている綱。地緯に同じ。

所作天地郊明堂歌五篇」に既出。

④乾樞 回転する天の中軸。「乾」は天の意。

②謝莊 劉宋の文人。四二一—四六六。『宋書』卷八五に伝あり。

⑤華蓋 紫微垣に連なる星座の名。本来は帝王などの貴人を乗せた車に差し掛ける傘をいう。本詩では両方の意味を重ねる。

彼が孝武帝の命により宋の「明堂歌」を作成したことは、『南

⑥紫微 紫微垣。天帝の居所である北極星を取り囲む、十五の星

齊書』樂志に「明堂歌辭、祠五帝。漢郊祀歌皆四言、宋孝武使

から成る星座。地上界の王宮に重ねられる。

謝莊造辭、莊依五行數、木數用三、火數用七、土數用五、金數

⑦六氣 天地の間に生ずる六つの気象。『莊子』逍遙遊にいう「若

用九、水數用六。」云々と記す。

夫乘天地之正、而御六氣之辯、以遊无窮者、彼且惡乎待哉。」

の「六氣」について、唐の陸德明『經典釈文』や成玄英『莊子疏』に引くところによると、西晋の司馬彪は『左伝』昭公元年という「天有六氣、……六氣曰陰陽風雨晦明」を踏まえて注し、東晋の支遁は「天地四時」を指すとし、李頤（晋人、生没年未詳）の集解は「平旦」「日午」「日入」「夜半」及び「天地二氣」を指すとしている。

⑧ 網縊 天地陰陽の気が盛んに働きかけ合っている状態。用例として、『易』繫辭伝下に「天地網縊、萬物化醇。」

⑨ 五靈 一般には瑞祥として現れる靈妙なる鳥獸をいう。杜預「春秋左氏伝序」に「麟鳳五靈、王者之嘉瑞也」、孔穎達の正義に「麟鳳與龜龍白虎五者、神靈之鳥獸、王者之嘉瑞也。」ここでは、後に続く歌辭に歌われる青帝・赤帝・黄帝・白帝・黒帝の五帝を指すと捉えておく。

⑩ 瑤卮 堂の入り口に掛ける簾の下の、美玉でできた石段。

⑪ 舞綴 舞踊の隊列。六朝楽府の会『隋書』音楽志訳注』（和泉書院、二〇一六年）一四四頁の注（41）等を参照。

⑫ 鐘石 鐘や磬といった金石の楽器が奏でる音。底本は「石」字一を缺く。今、『楽府詩集』巻二等によって補う。

⑬ 飛景 天を運行する太陽の光。

⑭ 黍盛 神に供えるために器に盛った穀物。『左伝』桓公六年に「吾牲牷肥腍、黍盛豊備」、杜注に「黍稷曰黍、在器曰盛。」

⑮ 牲牷 神に供えるため、完全に整えられた牛・羊・豚の肉。前掲『左伝』杜注に「牲、牛羊豕也。牷、純色完全也。」

⑯ 九幽 奥深いところ。地下世界を指す。同じ謝荘の「為朝臣与雍州刺史袁顛書」（『藝文類聚』卷二五、『宋書』袁顛伝は作者名を記さず。）に「徳洞九幽、功貫三曜。」

⑰ 三光 日月星をいう。前掲注⑯の謝荘「為朝臣与雍州刺史袁顛書」に見える「三曜」に同じ。『藝文類聚』は「三」を「二」に作るが、対を為す「九幽」とのバランスから見て、「三」に作る方がよい。

⑱ 玉鑾 皇帝の車に付ける鈴。ここでは上帝の車をいう。

⑲ 景福 大いなる福。『毛詩』周頌・潜に「以享以祀、以介景福」、鄭箋に「景、大也。」

⑳ 萬宇 よろずの家。天下の万民をいう。

㉑ 依漢郊祀迎神、三言、四句一轉韻 漢の「郊祀歌」十九章（『漢書』礼楽志）のうち、神を迎えるという内容で、三言の歌辭と

しては、「練時日」「華燭燭」の二首が挙げられる。歌辞内における内容的展開の面でも、本詩はこの二首の「郊祀歌」を踏襲している。今、その本文を、換韻箇所ので改行して示せば次のとおり。横山きのみ・西川ゆみ・谷口洋「漢郊祀歌十九章譯注」

〔『中国文学報』第八四冊、二〇一三年〕を参照。なお、上記

訳注では、羅常培・周祖謨『漢魏晉南北朝韻部演變研究』第一分冊（科学出版社、一九五八年）所収「兩漢詩文韻譜」に拠つて押韻が説明されている。

練時日、侯有望、炳膺蕭、延四方。

九重開、靈之旂、垂惠恩、鴻祐休。

靈之車、結玄雲、駕飛龍、羽旄紛。

靈之下、若風馬、左倉龍、右白虎。

靈之來、神哉沛、先以雨、般裔裔。

靈之至、慶陰陰、相放悲、震澹心。

靈已坐、五音飭、虞至旦、承靈億。

牲爾栗、黍盛香、尊桂酒、賓八鄉。靈安留、吟青黃、徧觀

此、眺瑤堂。

衆嬋並、綽奇麗、顏如茶、兆逐塵。

被華文、廁霧縠、曳阿錫、佩珠玉。

俠嘉夜、苗蘭芳、澹容與、獻嘉觴。

練時日一

華燭燭、固靈根。神之旂、過天門。車千乘、敦昆侖。

神之出、排玉房、周流雜、拔蘭堂。

神之行、旌容容、騎沓沓、般縱縱。

神之徠、泛翊翊、甘露降、慶雲集。

神之揄、臨壇宇、九疑賓、夔龍舞。

神安坐、鵝吉時、共翊翊、合所思。

神嘉虞、申貳觴、福滂洋、邁延長。

沛施祐、汾之阿、揚金光、橫泰河、莽若雲、增陽波。徧臚

驩、騰天歌。

華燭燭十五

雍臺辨朔 澤宮練辰 雍臺にて朔を辨じ 澤宮にて辰を練ぶ

潔火夕照 明水朝陳

潔火 夕べに照り 明水 朝に陳べらる

六瑚^⑥賁室 八羽^④華庭

六瑚 室に賁かがやき 八羽 庭に華やかなり

昭事先聖^⑥ 懷濡^⑥上靈

先聖に昭事し 上靈を懷濡す

肆夏式敬^⑦ 升歌^⑦發德

肆夏もて敬あつむを式し 升歌もて徳を發せん

永固鴻基 以綏萬國

永とこしえに鴻基を固め 以て萬國を綏やすんぜん

右登歌^⑧詞 舊四言^⑧

右は登歌の詞なり 舊の四言なり

天子の設けた太学、辟雍にて朔日が見定められ、祭祀のために弓の達人を選び抜く宮殿、沢宮にて良き時が選ばれた。

清らかな火が夕闇を照らし、明るく澄んだ水が朝に延べ連ねられる。

黍稷を盛った六つの祭器は室内に輝き、八佾の舞は明堂の前庭で華やかに練り広げられる。

先の世の聖人に、その御霊を光り輝かせつつお仕えし、上帝をお呼びして御霊を安んじる。

「肆夏」を演奏して先聖や上帝への敬意を表し、堂上での歌を歌ってその徳を輝かせよう。

永久に大いなる礎を盤石のものとし、以て天下を太平に治めよう。

右は堂上で歌う歌の歌辞 旧来の四言である。

○押韻 「辰・陳」は上平17「眞」。「庭・靈」は下平15「青」。「徳・國」は入声25「徳」。

①雍臺 天子が設けた太学、辟雍をいう。辟雍は、本訳注稿の冒 ④を参照。用例として、揚雄「劇秦美新」(『文選』卷四八)に

頭に、蔡邕が漢樂を論叙して「三曰大射辟雍」と既出。その注 「明堂辟臺、壯觀也。」

②澤宮 弓を射る腕前によつて人士を選抜する場所。『礼記』射

義に「天子將祭、必先習射於澤。澤者、所以擇士也。已射於澤、而后射於射宮。射中者、得與於祭、不中者、不得與於祭」、鄭玄注に「澤、宮名也。」

③六瑚 商代の、黍稷を盛る六つの祭器。『礼記』明堂位に「有虞氏之兩敦、夏后之四連、殷之六瑚、周之八簋」、鄭玄注に「皆黍稷器。制之異同未聞。」

④八羽 古代の天子が用いた舞、八佾。縦横八人ずつ、合計六十四人で編成される。『論語』に八佾篇あり。

⑤昭事先聖 「昭事」は、対象を光り輝かせつつ敬意を以て仕える。『毛詩』大雅・大明に「昭事上帝、聿懷多福。厥德不回、以受方國」、鄭箋に「昭、明。」太学で「先聖」を祭ることは、『呂氏春秋』孟夏紀・尊師に「天子入太学、祭先聖。」とある。⑥懷濡 御霊をお迎えして安んずる。『毛詩』周頌・時邁に「懷柔百神、及河喬嶽」、毛伝に「懷、來。柔、安。」「濡」は「柔」に通ず。『經典釈文』に「本亦作濡。兩通、俱訓安也。」清の段玉裁『詩經小学』（『皇清經解』卷六三三）に「按、宋書樂志、

宋明堂歌、謝莊造登歌詞曰、昭事先聖、懷濡上靈。然則六朝時

本作懷濡百神也。柔濡古音同。是假濡爲柔。」と論じる。

⑦肆夏式敬 「肆夏」は、古代の樂章、九夏の一つ。『周礼』春官・大司楽に「王出入則令奏王夏、尸出入則令奏肆夏、牲出入則令奏昭夏。」同・春官・鍾師に「掌金奏。凡樂事以鍾鼓奏九

夏。王夏・肆夏・昭夏・納夏・章夏・齊夏・族夏・祓夏・醵夏。」「式」は、表すの意。『漢書』揚雄伝上に引く「河東賦」に「教衆神使式道兮、奮六經以據頌」、顔師古注に「式、表也。」底本が「戒」に作るのは、字形の類似による誤り。今、『南齊書』樂志等によつて改める。対句をなす「發德」とのバランスから見ても、「式」の方がよい。

⑧升歌 祭祀等で堂上に登つて歌曲を演奏すること、あるいはその歌曲。用例が、『儀礼』燕礼、『礼記』郷飲酒義等に見える。⑨登歌 顔延之「宋南郊雅樂登歌三篇」に既出。『南齊書』樂志では、歌辞の前に「皇帝升明堂、奏登歌辭。」との説明が見える。

⑩舊四言 『南齊書』樂志に、本歌辞の制作経緯に関連して「漢郊祀歌皆四言」と記す。前詩の注②を参照。前掲注⑨の顔延之作品のうち、「天地郊夕牲歌」「天地郊迎送神歌」も四言である。

維天爲大^① 維聖祖是則^②

辰居萬宇^③ 綴旒下國^④

內靈八輔^⑤ 外光四瀛^⑥

蒿宮仰蓋^⑦ 日館希旌

複殿留景^⑧ 重檐結風

刮楹接緯^⑨ 達嚮承虹

設業設虞^⑩ 在王庭^⑪

肇禋祀^⑫ 克配乎靈^⑬

我將我享^⑭ 維孟之春

以孝以敬^⑮ 以立我烝民^⑯

維れ天の大爲る 維れ聖祖は是れ則るなり

萬宇に辰居し 下國を綴旒す

内に八輔に靈あり 外に四瀛に光あり

蒿宮に蓋を仰ぎ 日館に旌を希む

複殿 景を留め 重檐 風を結ぶ

刮楹 緯に接し 達嚮 虹を承く

業を設け虞を設く 王庭に在りて

肇めて禋祀してより 克く靈に配せり

我は將^{やしな}い我は享^{ささ}ぐ 維れ孟の春に

以て孝し以て敬し 以て我が烝民に立あらしめん

右歌太祖文皇帝詞

依周頌體^⑰

右は太祖文皇帝を歌う詞

周頌の體に依る

ああ天の偉大なることよ、ああ聖祖はまさしくこれに則っていらつしやる。

北極星に向かつて幾多の星が拱手するように、聖祖は万の家々を統べる位置にあられ、はたあしを結わえ付けるように、天下の国々を結び合わせていらつしやる。

内には八つの州に神々しい威嚴が示され、外においては四つの海に光輝が行き渡っている。

大きく茂った蒿の柱が立つ正殿に、天子に差しかけられる傘が仰ぎ見られ、太陽の輝く館に、天子の御旗が望まれる。

二層の宮殿は日の光を留め、二重の檐ひさしのもとには風が渦を作る。
磨き上げられた柱に接して五星が運行し、四方に開け放たれた窓は虹を迎える。

飾りを施した横木を設け、楽懸を吊るす柱を設ける、王宮の庭で。

始めて火を焚いて天帝を祭つてより、よくその御霊に配せられて、我が聖祖は祭られてきた。

我は供物を養い、我は神前に捧げる、ああこの孟春のときに。

廟前に、孝を尽くし敬意を込めてお仕えし、これによって我が万民に穀物をもたらそう。

右は劉宋の太祖文帝を歌いあげる歌辞 『毛詩』周頌のスタイルに依る。

○押韻 「則・國」は入声25「德」。「瀛・旌」は下平14「清」。「風・虹」は上平1「東」。「庭・靈」は下平15「青」。「春」は上平18「諄」、「民」は上平17「眞」。

①維天爲大 類似句として、『毛詩』周頌に「維天之命」という詩題がある。

班固「典引」(『文選』卷四人)に「是以高光二聖、宸居其城、蔡邕の注に「言高祖光武、如北辰居其所、而衆星拱之。」「宸

②維聖祖是則 「聖祖」は、劉宋の孝武帝(在位四五三—四六四)

劉駿(『宋書』孝武帝紀)から、文帝(在位四二四—四五三)

劉義隆(『宋書』文帝紀)に向けられた尊称。孝武帝は文帝の

譬如北辰居其所、而衆星共之。」に拠る。「萬宇」は先の「迎神歌詩」に既出。

第三子。後掲注⑨をも参照。「則」字、底本は「言」に作る。

④綴旒下國 「綴旒」は、はたあしを結わえ付けるように天下を

今、諸本によって改める。

統率すること。『毛詩』商頌・長發に「受小球大球、爲下國綴

③辰居萬宇 「辰居」は、天子が天下の中心に居所を構えること。

旒、何天之休、鄭箋に「綴、猶結也。旒、旌旗之垂者也。」「下

「國」は、配下の国々。天下をいう。『毛詩』魯頌・閼宮にも「奄有下國、俾民稼穡。」

⑤ 八輔 天子を輔弼する八つの地域。八州（天下をいう九州から、視点となる中央を除いた八つの州）の意に近い。

⑥ 四瀛 四つの海。天下をいう。

⑦ 蒿宮 高く茂る蒿で柱を作り為した周代の正殿。『大戴礼記』

明堂に「周時德澤洽和、蒿茂大以爲宮柱、名蒿宮也。此天子之路寢也。」

⑧ 複殿 屋根を二つ重ねた宮殿。『礼記』明堂位にいう「山節藻梲、復廟重檐、刮楹達鄉……天子之廟飾也」の「復廟」に同じ。

その鄭玄注に「復廟、重屋也。」

⑨ 重檐 二重になったひさし。前掲注⑧『礼記』明堂位に見える。

その鄭玄注に「重檐、重承壁材也。」

⑩ 刮楹接綽 「刮楹」は、磨き上げられた柱。前掲注⑧『礼記』明堂位に見える。その鄭玄注に「刮、刮摩也。」「綽」は、五つの惑星、木星・火星・金星・水星・土星の総称。

⑪ 達嚮 四方に開けた窓。前掲注⑧『礼記』明堂位に見える「達

鄉」に同じ。その鄭玄注に「郷、牖屬。謂夾戸窓也。每室八窓、

爲四達。」

⑫ 設業設虞 『毛詩』周頌・有瞽に「有瞽有瞽、在周之庭。設業設虞、崇牙樹羽」、毛伝に「業、大板也。所以飾柷爲縣也。…植者爲虞、衡者爲柷。」

⑬ 在王庭 前掲注⑫『毛詩』周頌・有瞽にいう「在周之庭」を踏まえるほか、『尚書』盤庚中、多士、多方にも同一句が見える。

⑭ 肇禋祀 『毛詩』周頌・維清に「肇禋、迄用有成、維周之禎」、毛伝に「肇、始。禋、祀也。」「禋祀」は、火を焚いて煙を高く

上げ、天帝を祭ること。『周礼』春官・大宗伯に「以禋祀祀昊天上帝、以實柴祀日月星辰、以樵燎祀司中司命饗師雨師。」

⑮ 克配孚靈 『毛詩』周頌・思文に「思文后稷、克配彼天。立我丞民、莫匪爾極」、鄭箋に「克、能也。」『孝經』聖治章に「昔者周公郊祀后稷以配天、宗祀文王於明堂以配上帝。」「配」は、

あわせまつる。ここでは、文帝劉義隆を、天帝にあわせ祭るところをいう。

⑯ 我將我享 『毛詩』周頌・我将に「我將我享、維羊維牛、維天其右之」、鄭箋に「將、猶奉養也。我奉養、我享祭之。羊牛皆

充盛肥腩、有天氣之力助。言神饗其德而右助之。」その小序に

「我將、祀文王於明堂也。」

①⑦以孝以敬 『毛詩』周頌・載見に「率見昭考、以孝以享、以介眉壽、永言保之、思皇多祐。」

①⑧立我烝民 前掲注①⑤『毛詩』周頌・思文に見える句。その鄭箋に「立、當作粒。烝、衆也。」

①⑨太祖文皇帝 劉宋の文帝、劉義隆。前掲注②をも参照。ここに収録された謝莊「宋明堂歌」は、孝武帝劉駿が、その父である先の文皇帝を、上帝及び五帝に配して明堂に祀る歌辞である。

『宋書』礼志三に、大明五年（四六一）四月庚子（十四日）の詔に「朕皇考太祖文皇帝」の徳を称え、翌年正月、鄭玄『礼記』

注に依拠して、孝武帝が明堂で「五時の帝を祠祭し、文皇帝を

以て配」したこと、大明五年九月、「太祖文皇帝」を明堂に祀る際に供える牛について担当者間で議論のあったことを記す。

②⑩依周頌體 「周頌」は、西周の宗廟祭祀の歌辞。『毛詩』周頌譜の鄭玄注に「周頌者、周室成功致太平德洽之詩。其作在周公攝政成王即位之初。」『南齊書』樂志にも「周頌我將祀文王、言

皆四、其一句五、一句七。謝莊歌宋太祖亦無定句。」と言及する。本詩が『毛詩』周頌を踏まえることは、前掲注①⑫⑬⑭⑮

⑩⑪⑫に示したとおり。

參昞夕^① 駟照晨^②
參は夕べに昞^{かたむ}き 駟は晨に照^{かがや}く

靈乘震^③ 司青春^④
靈は震を乗^{おさ}め 青春を司る

鴈將向^⑤ 桐始蕤^⑥
鴈は將に向わんとし 桐は始めて蕤^{はなま}く

柔風舞^⑦ 暄光遲^⑧
柔風舞い 暄光遅し

萌動達^⑨ 萬品新^⑩
萌動達し 萬品新たなり

潤無際^⑪ 澤無垠^⑫
潤は際無く 澤は垠^{かぎり}無し

（柳川順子）

右歌青帝詞 三言 依木數^⑧

右は青帝を歌う詞 三言 木の數に依る

參星は夕べにかたむき、駟星は明け方に輝く。

靈妙なる青帝は東方をおさめ、季節は春を司る。

雁は北に向かつて飛び立とうとし、桐はようやく花を咲かせる。

柔らかな風が舞い、暖かな春の光がゆつくりと差し込む。

草木は芽吹きはじめ、万物が新たに生まれ変わる。

恵みは果てしなく、その恩沢は限りがない。

右は青帝を歌う詞。三言。木の生數に依る。

○押韻 「晨・春」は上平17「眞」。「蕤・遲」は上平6「脂」。「新・垠」は上平17「眞」。

①參昴夕 參は星の名、二十八宿の一、西方第七宿。『左伝』昭

公元年に「遷實沈於大夏、主參。」明の楊慎『升庵詩話』諺語

有文理に「四民月令引農諺、三月昏、參星夕」と見える。「昴」

は中華書局本、『南齊書』樂志、『樂府詩集』では「昴」に作る。

「昴」字が『宋書』にはこのほかに用例がないので、中華書局

本が「昴」に改めたか。

見而隕霜」、韋昭注に「駟、天駟、房星也」とある。房は二十
八宿の一、東方第四宿。

③靈乘震 「震」は東方を指す。『易』説卦に「萬物出乎震。震、

東方也。」また『漢書』魏相伝に、「東方之神太昊、乘震執規司

春。……明王謹於尊天、慎于養人、故立羲和之官以乘四時」、

顔師古注に「乘、治也」とある。沈約「梁明堂登歌・青帝」(『隋

②駟照晨 駟は星の名。『国語』周語中に「本見而草木節解、駟

書』音楽志上)に「帝居在震、龍德司春」とある。

④ 司青春 『楚辭』大招に「青春受謝、白日昭只」、王逸注に「青、

東方春位、其色青也」とある。

⑤ 鴈將向 『礼記』月令に「孟春之月……東風解凍、蟄蟲始振、

魚上冰、獺祭魚、鴻鴈來」、注に「鴈自南方來、將北反其居」

とある。なお、「鴈將向」以下四句は『藝文類聚』にはない。

⑥ 桐始薹 『礼記』月令に「季春之月……桐始華、田鼠化爲鴛、

虹始見、萍始生」とある。「薹」は草木につく花のこと。陸機

「文賦」(『文選』卷一七)に「播芳薹之馥馥、發青條之森森、

李善注に「説文曰、薹、草木華垂貌。纂要曰、草木華曰薹。」

⑦ 柔風舞 「柔風」は春風のこと。『管子』四時に「東方曰星、

其時曰春、其氣曰風。……然則柔風甘雨乃至、百姓乃壽、百蟲

乃蕃、此謂星德」、唐の房玄齡注に「柔、和也」、「星、以和爲

德也」とある。陸機「園葵詩」(『文選』卷二九)に「時逝柔風

散、歲暮商森飛」、呂延濟注に「柔風、春風也」とある。

⑧ 暄光暉 『黄帝内経素問』五運行大論に「東方生風……在氣爲

柔、在藏爲肝、其性爲暄、其德爲和」、唐の王冰注に「暄、温

也。肝、木之性也」とある。

⑨ 萌動達 「萌動」は草木が芽吹くこと。『礼記』月令に「孟春

之月……天地和同、草木萌動」とある。

⑩ 萬品新 陳琳「鸚鵡賦」(『藝文類聚』卷九一)に「咨乾坤之兆

物、萬品錯而殊形」、また『宋書』後廢帝紀に「今開元肆宥、

萬品惟新」とある。

⑪ 潤無際 「潤」は恩沢。『淮南子』泰族訓に「堯治天下、政教

平、德潤洽」とある。

⑫ 澤無垠 「無垠」は限りのないこと。『楚辭』遠遊に「道可受

兮而不可傳、其小無内兮其大無垠」、朱熹の集註に「小無内、

大無垠、言無所不在也」とある。

⑬ 青帝 「青帝」は東方の春を司る神。『史記』封禪書に「秦宣

公作密時於渭南、祭青帝」とある。

⑭ 依木數 「木數」については、『南齊書』樂志に「明堂歌辭、

祠五帝。漢郊祀歌皆四言、宋孝武使謝莊造辭、莊依五行數、木

數用三、火數用七、土數用五、金數用九、水數用六。案鴻範、

五行、一曰水、二曰火、三曰木、四曰金、五曰土。月令、木數

八、火數七、土數五、金數九、水數六。蔡邕云、東方有木三土

五、故數八。南方有火二土五、故數七。西方有金四土五、故數

九。北方有水一土五、故數六。又納音數、一言得土、三言得火、

五言得水、七言得金、九言得木。若依鴻範、木數用三、則應水

一火二金四也。若依月令、金九水六、則應木八火七也。當以洪

範二二之數、言不成文、故有取捨、而使兩義並違、未詳以數立

言爲何依據也。周頌・我將祀文王、言皆四、其一句五、一句七。
謝莊歌宋太祖亦無定句」とある。

龍精初見大火中^① 朱光北至圭景同^②

帝在在離寇司衡^③ 水雨方降木槿榮^④

庶物盛長咸殷阜^⑤ 恩覃四冥被九有^⑥

右歌赤帝辭 七言 依火數^⑦

龍精初めて見る^{あろむ} 大火 中せしとき 朱光北に至りて 圭景同じ^{けいえい}

帝在り離に在りて寔に司衡し^{まこと} 水雨は方に降り 木槿^{もくぎん} 榮さく^{はな}

庶物は盛長し^{ことごと} 咸く殷阜にして^{いんふ} 恩は四冥に覃く^{あまね} 九有を被う

右は赤帝を歌う辭 七言 火の數に依る

蚕が初めて現れる大火星が正中する頃、太陽は北に至り、日時計と日影が一致する。

赤帝は南におわして夏の季節を司り、雨が降り木槿が花咲く。

万物は盛んに生長し、すべてが豊か。(赤帝の) 恩沢は四海に行き渡り、九州を覆う。

右の歌は赤帝の辭。七言。火の生數に依る。

○押韻 「中・同」は上平1「東」。「衡・榮」は下平12「庚」。「阜・有」は上声44「有」。

①龍精初見大火中 「龍精」は蚕のこと。『周礼』夏官・馬質に 「大火」は星の名。二十八宿心宿の中央に位置する。『左伝』

「禁原蠶者」とあり、鄭玄注に「原、再也。天文辰爲馬。蠶書、 襄公九年に「心爲大火、陶唐氏之火正閼伯、居商丘、祀大火、

蠶爲龍精、月直大火、則浴其種」とある。 而火紀時焉。」また『毛詩』小雅・四月に「四月維夏、六月徂

暑」、毛伝に「徂、往也。六月火星中、暑盛而徂矣」、「毛詩」

豳風・七月に「七月流火、九月授衣」、毛伝に「火、大火也」、

鄭箋に「大火者、寒暑之候也。火星中而寒暑退」とある。『礼

記』月令には「季夏之月、日在柳、昏火中、且奎中」とある。

②朱光北至圭景同 張載「七哀詩」其二『文選』卷二二に「朱

光馳北陸、浮景忽西沈」、李周翰注に「朱光、日也。」

「北至」は夏至。張衡「西京賦」〔『文選』卷二〕に「日北至

而含凍、此焉清暑」、薛綜注に「日北至、謂夏至時、猶馮寒而

有凍、帝或避暑於甘泉宮、故云清暑」とある。

「圭景」は日影を計測する土圭と日影のこと。『周礼』地官

・大司徒に「以土圭之法、測土深、正日景、以求地中」とある。

また張衡「東京賦」〔『文選』卷三〕に「土圭測景、不縮不盈、

薛綜注に「鄭玄曰、謂圭長一尺五寸、夏至之日、豎八尺表、日

中而度之、圭影正等、天當中也。若影長於圭、則太近北。圭長

於影、則太近南。近北多寒、近南多暑、近東多風、近西多雨。」

③帝在在離寔司衡 『毛詩』小雅・魚藻に「王在在鑄、豈樂飲酒」

とある。「帝在」は、中華書局本は「帝位」に作る。「離」は南

方、日を指す。『易』説卦に「象曰……離也者、明也、萬物皆

相見、南方之卦也。……離、爲火、爲日」とある。「司衡」に

ついては『漢書』魏相伝に「南方之神炎帝、乘離執衡司夏。」

④水雨方降木槿榮 『藝文類聚』卷三に「禮記曰、孟夏月、盛德

在火……蟬始鳴、木槿榮」、『藝文類聚』卷八九に「禮記曰、仲

夏之月、木槿榮」とある。

⑤庶物盛長咸殷阜 「庶物」は萬物。『易』乾に「保合大和、乃

利貞。首出庶物、萬國咸寧」とある。「殷阜」は富み盛んなさ

ま。張衡「西京賦」〔『文選』卷三〕に「徒以地沃野豐、百物殷

阜」、薛綜注に「殷、盛也。阜、大也」とある。

⑥恩覃四冥被九有 「覃」は広く施す。『毛詩』召南・葛覃に「葛

之覃兮、施于中谷」、毛伝に「覃、延也。」また『隋書』音楽志

下「五郊歌辞五首・黑帝歌辞奏羽音」に「恩覃外區、福流京室。」

「四冥」は「四溟」に同じ。四海、天下。張協「雜詩十首」其

十〔『文選』卷二九〕に「雲根臨八極、雨足灑四溟」、劉良注に

「四溟謂四海也。」「宋書」孝武帝紀に「昔周王驥迹、寔窮四溟。」

「九有」は九州。『毛詩』商頌・玄鳥に「方命厥后、奄有九有」、

毛伝に「九有、九州也」とある。

⑦赤帝 「赤帝」は南方を司る神。『史記』天官書に「赤帝行德、

天牢爲之空」、正義に「赤帝、南方赤熒怒之帝也」とある。

莊造辭、莊依五行數、……火數用七。」「歌青帝詞」注⑭参照。

⑧ 依火數 「火數」については、『南齊書』樂志に「宋孝武使謝

履建宅中^① 司繩御四方^② 履建して中^う寓^{やす}を宅^{やす}んじ 司繩して四方を御す

裁化遍寒燠^③ 布政周炎涼^④ 裁化 寒燠を遍くし 布政 炎涼を周くす

景麗條可^⑤折 霜明冰可折 景麗しく條は結ぶべく 霜明らかにして氷は折るべし

凱風扇朱辰^⑦ 白雲流素節^⑧ 凱風 朱辰を扇し 白雲 素節を流す

分至乘結暑^⑨ 啓閉集恆度^⑩ 分至 結暑^{けつき}を乗り 啓閉 常度^{はか}に集まる

帝運緝萬有^⑪ 皇靈澄國步^⑫ 帝運 萬有^{おさ}を緝^{おさ}め 皇靈 國步^{さた}を澄^{さた}む

右歌黃帝辭 五言 依土數 右は黃帝を歌う辭 五言 土の數に依る

中央にあつて中原を安定させ、法則を司つて四方を制御する。

黃帝は陰陽の變化を裁いて寒暖を行き渡らせ、季節を制御して炎涼を遍くおしひろめていく。

麗しい光が降り注ぐ夏には枝を結ぶことができ、白い霜が降りる冬には氷を張ることができる。

(黃帝のおかげで) 南風は夏の季節を扇ぎ寄せられるし、白い雲は秋の季節をもたらせる。

分至(春分・秋分・夏至・冬至)は日影を結ぶのを計ることで決まり、啓閉(立春・立夏・立秋・立冬)は永遠の法則にし

たがつて定まる。

黃帝のはたらきは万物をおさめ、黃帝の靈妙な力は國運を安定させる。

右は黄帝を歌う辞。五言。土の生数に依る。

○押韻 「方・涼」は下平10「陽」。「結・節」は入声16「屑」。「折」は入声17「薛」。「度・步」は去声11「暮」。

①履建宅中寓 「履」は踏む。『易』履に「履虎尾」。「建」は建

てる。『易』比に「象曰、地上有水。比、先王以建萬國、親諸

侯。」但し、「建」は『南齊書』樂志や『藝文類聚』卷四三は「良」

に作る。「良」は『易』艮に「象曰、良、止也。……初六、良

其趾」、『易』説卦に「良、止也」とある。また『漢書』魏相伝

に「中央之神黄帝、乘坤艮執繩司下土」、『易』説卦に「坤也者、

地也」とある。この詩の冒頭の二句は、この『漢書』に見える

「乘坤艮執繩司下土」と同義か。また『隋書』音樂志下・五郊

歌辞五首「黄帝歌辞奏宮音」に、「爰稼作土、順位稱坤。孕金

成德、履艮爲尊。」「寓」は「宇」の古字。「中宇」は中原。顔

延之「三月三日曲水詩序」(『文選』卷四六)に「將徙縣中宇、

張樂岱郊」、呂延濟注に「縣、都也。中宇、中國也。」「宅」は

『礼記』郊特性に「曰、土反其宅、水歸其壑」とあり、孔穎達

の疏に「反、歸也。宅、安也、土歸其安、則得不崩。」

②司繩御四方 「繩」は法則。董仲舒『春秋繁露』五行相生に「執

繩而制四方」、『淮南子』天文訓に「中央、土也。其帝黄帝、其

佐后土、執繩而制四方」とある。『南齊書』樂志では「御」は

「總」に作る。『易』姤に「后以施命誥四方。」

③裁化遍寒燠 「裁化」は、人事の根本である自然の陰陽の變化

を裁くこと。『易』繫辭伝上に「是故形而上者謂之道。形而下

者謂之器。化而裁之謂之變。推而行之謂之通。舉而錯之天下之

民、謂之事業」、孔穎達の疏に「化而裁之謂之變者、陰陽變化

而相裁節之、謂之變也。是得以理之變也。猶若陽氣之化不可久

長、而裁節之以陰雨也、是得理之變也。陰陽之化、自然相裁、

聖人亦法此而裁節也」とある。「寒燠」は寒暖。『漢書』天文志

に「故日進爲暑、退爲寒。若日之南北失節、暑過而長爲常寒、

退而短爲常燠。此寒燠之表也、故曰爲寒暑。」

④布政周炎涼 「布政」は、黄帝が季節を制御しておしひろめて

いくさまを言うか。『左伝』成公二年に「詩曰、布政優優、百

祿是遹」とある。「炎涼」は『水經注』滎水に「地勢不殊、而

炎涼異致」とある。第三句は易にもとづいて自然をいい、第四句では左伝にもとづいて人事を言うともとれるが、ここでは季節の変わり目(第三句)から季節が遍く行き渡る(第四句)までを司る黄帝を詠じたものと解する。

⑤景麗條可結 『藝文類聚』卷八八に「六韜曰、冬氷可折、夏條

可結」、『淮南子』説林訓に「冬氷可折、夏木可結、時難得而易失」とある。この例からは第五・六句は夏と冬を詠んだものと思われるが、第七・八句が夏と秋を詠じることから、第五句は春を詠んだとも考えられる。「景麗」を春景に用いる例は、庾信の「慨然成咏」詩に「新春光景麗、遊子離別情」があるが、齊の虞羲「詠秋月詩」(『藝文類聚』卷一)の「影麗高臺端、光入長門殿」、宋の鮑照「侍宴覆舟山應詔詩」(『藝文類聚』卷三九)の「繁霜飛玉闥、愛景麗皇州」などの例は、いずれも春景ではない。ここではひとまず夏を詠む句とする。

⑥霜明冰可折 「霜明」の用例として、時代は下るが、庾肩吾「冬曉詩」(『玉台新詠』卷八)に「月光侵曙後、霜明落曉前。」

⑦凱風扇朱辰 「凱風」は南風。『毛詩』邶風・凱風に「凱風自南、吹彼棘心。」「扇」は扇ぎ寄せる。陶淵明「擬古詩」(『文選』

卷三〇)に「日暮天無雲、春風扇微和。」

⑧白雲流素節 「白雲」は、『毛詩』小雅・白華に「英英白雲、露彼菅茅。」「素節」は秋。張協「雜詩十首」其二(『文選』卷二九)に「金風扇素節、丹霞啓陰期」、張銑注に「秋爲白藏、故云素節」とある。

⑨分至乘結晷 「分至」は春分、秋分、冬至、夏至。『左伝』僖公五年に「凡分至啓閉、必書雲物」、杜預の注に「分、春、秋分也。至、冬、夏至也。」「結晷」は他に用例がない。『南齊書』では「經晷」に作る。左思「魏都賦」(『文選』卷六)に「晷漏肅唱、明宵有程」、劉逵注に「晷漏、漏刻也」、李善注に「説文曰、晷、景、故曰晷漏」とある。「結晷」はここでは日影を結ぶことと解する。「乘」は計る意か。『周礼』稟人に「乘其事」、注に「鄭司農云、乘、計也。計其事之成功也」とある。

⑩啓閉集恆度 「啓閉」は立春、立夏、立秋、立冬。『左伝』僖公五年に「凡分至啓閉、必書雲物」、杜預の注に「啓、立春、立夏。閉、立秋、立冬」とある。『漢書』律曆志上には「時所以記啓閉也、月所以紀分至也。啓閉者、節也。分至者、中也。」「恆度」は、『宋書』律曆志下に「南北之極、日有恆度」、南

齊書』高帝本紀上に「夫昏明相襲、晷景之恆度、春秋遞運、時

「國歩」は国運。『毛詩』大雅・桑柔に「於乎有哀、國歩斯

歲之常序」とある。「集」は止まる、とどまる。『毛詩』唐風・

頌、毛伝に「歩、行。頌、急也。」用例として、謝莊「孝武帝

「鶉羽に「肅肅鶉羽、集于苞栩、毛伝に「集、止」とある。

哀策文』『藝文類聚』卷一三に「王室多故、國歩方蹇。」

⑪帝運緯萬有

「緯」はととのえおさめる。「輯」に通じる。『国

「澄」は安定させる。范曄「後漢書光武紀贊」『文選』卷五

語』晋語八に「及爲成帥、居太傅、端刑法、輯訓典、國無姦民、

○に「三河未澄、四關重擾」、李周翰注に「澄、定。擾、亂

韋昭注に「輯、和也」とある。また王儉「褚淵碑文」『文選』

也。」

卷五八に「是時天歩初夷、王途尚阻、元戎啓行、衣冠未緝、

⑬黃帝 「黃帝」は中央の神。『礼記』月令に「季夏之月）中央

呂延濟注に「緝、理也」とある。

土、其日戊己、其帝黃帝、其神后土。」

⑫皇靈澄國歩

「皇靈」は天帝、ここでは黃帝。秦嘉「贈婦詩三

⑭依土數 「土數」については、『南齊書』樂志に「宋孝武使謝

首」其二『玉台新詠』卷一）に「皇靈無私親、爲善荷天祿。」

莊造辭、莊依五行數、……土數用五。」『歌青帝詞』注⑭参照。

百川如鏡天地爽且明

百川は鏡の如く 天地爽にして且つ明らかかなり

雲沖氣舉德盛在素精

雲は沖き氣は舉がり 徳は盛んにして素精に在り

木葉初下洞庭始揚波

木葉 初めて下り 洞庭始めて波を揚ぐ

夜光徹地翻霜照懸河

夜光 地に徹し 翻霜 懸河に照る

庶類收成歲功行欲寧

庶類 收成し 歲功 行くゆく寧からんと欲す

浹地奉渥罄宇承秋靈

地に浹く渥を奉じ 罄宇 秋靈を承く

右歌白帝辭

九言

依金數

右は白帝を歌う辭

九言

金の數に依る

あまたの川は鏡のように波も静かにきらめき、天地は爽明。

雲は沖わき気は立ちのぼり、季節の盛んな気はまさに秋にある。

木の葉が落ち始めると、洞庭湖はようやく波を揚げるようになる。

月の光があたり一面にくまなく行きわたり、霜が空に漂い天の河とともに互いに燦めいている。

万物は穫り入れの時期を迎え、収穫はゆくゆく安定するだろう。

地として恵みを受けぬところはなく、この世のすべてのものが秋の恩恵を受ける。

右は白帝を歌う辞。九言。金の生数による。

○押韻 「明」は下平12 「庚」、「精」は下平14 「清」。「波」は下平8 「戈」、「河」は下平7 「歌」。「寧・靈」は下平15 「青」。

①百川如鏡天地爽且明 「百川」は『毛詩』小雅・十月之交に「百

川沸騰、山冢峯崩。」水を鏡にたとえる例には、謝朓「奉和隨

王殿下」其八に「方池含積水、明流皎如鏡」などがあるが、秋

景とは限らない。

『尚書』牧誓に「時甲子昧爽」、『經典積文』に「爽、明也。」

②雲沖氣攀德盛在素精 「沖」は涌く。『説文』水部に「沖、涌

絲也」、段玉裁注に「絲、搖、古今字。涌、上涌也。搖、旁搖

也。」「德盛」は『南齊書』では「盛德」に作る。「盛德」は四

とから秋の気をいうか。なお百衲本『宋書』は「精」の字を缺くが、中華書局本に従って補った。

③木葉初下洞庭始揚波 『楚辭』九歌・湘夫人に「嫋嫋兮秋風、

洞庭波兮木葉下。」また『楚辭』九歌・少司命に「與女遊兮九

河、衝風至兮水揚波。」なお、『藝文類聚』には「木葉初下」以下の四句が無い。

④夜光徹地飄霜照懸河

『楚辭』天問に「夜光何德、死則又育」、王逸注に「夜光、月也」。「飄霜」は空中を飛ぶ氷結した水蒸気のことか。『晋書』卷一一一載記論贊に「角端掩月、步搖翻霜。」

「懸河」は「河漢」（天の河）のこと。用例として、梁の蕭子顯「楽府烏棲曲応令二首」其二「淚黛紅輕」（『玉台新詠』卷九）に、「金壺夜水誰能多、莫持除用比懸河」とある。ここでは「飄霜」と「懸河」（河漢）が相照らす状況と解する。なお、この句は「飄霜」が「懸河」（滝）を照らし出すように見えたと解することも可能かもしれない。

⑤庶類收成歲功行欲寧

「庶類」は萬物。『国語』鄭語に「夏禹能單平水土、以品處庶類者也」、韋昭注に「單、盡也。庶、衆也。品、高下之品也。禹除水災、使萬物高下各得其所。」「收成」は收穫すること。『爾雅』釈天に「春爲發生、夏爲長贏、秋爲收成、冬爲安寧。」張衡「東京賦」（『文選』卷三）に「度秋豫

以收成、觀豐年之多稼」、張銑注に「言秋游者觀收成、見豐年之多稼也」とある。「歲功」は收穫。『漢書』礼楽志二に、「陽

出布施於上而主歲功、陰入伏藏於下而時出佐陽。陽不得陰之助、亦不能獨成歲功」とある。陶淵明「癸卯歲始春懷古田舍詩」其二に「雖未量歲功、即事多所欣。」

⑥泱地奉渥罄宇承秋靈

「泱」はあまねくゆきわたること。鮑照「喜雨詩」（『藝文類聚』卷二）に「升雰泱地維、傾潤瀉天潢。」「渥」は恩沢。用例として、謝惠連「祭古冢文」（『文選』卷六〇）に「射聲垂仁、廣漢流渥」、江淹「為蕭太傅謝追贈父祖表」に「奉渥銘心、祇光慟慮。」

「罄宇」はこの世のすべて。『晋書』地理志上に「先王桑梓、罄宇來歸」とある。『爾雅』釈詁に「罄、盡也。」

⑦白帝

「白帝」は西方を司る神。『周礼』天官・大宰に「祀五帝」、疏に「五帝者……西方白帝、白招拒」とある。

⑧依金數

「金數」については、『南齊書』楽志に「宋孝武使謝莊造辭、莊依五行數、……金數用九。」「歌青帝詞」注⑭参照。

歲月既晏方馳^① 靈乘坎德司規^②

歲月既に晏れ方に馳せ

靈は坎德を乗め司規す

玄雲合晦鳥路^③ 白雲繁亘天涯^④

玄雲合して鳥路を晦くし 白雲繁く天涯に亘る

雷在地時未光 飭國典開關梁^⑤

雷は地に在りて時未だ光あらず 國典を飭め關梁を閉す

四節遍萬物殿^⑦ 福九域祚八鄉^⑧

四節遍く萬物は殿り 九域に福し八郷に祚す

晨晷促夕漏延^⑨ 太陰極微陽宣^⑩

晨晷は促かにして夕漏は延し 太陰極まりて微陽宣ぶ

鵲將巢冰已解^⑪ 氣濡水風動泉^⑫

鵲は將に巢わんとし冰は已に解け 氣は水を濡し風は泉を動かす

右歌黑帝辭^⑬ 六言 依水數^⑭

右は黑帝を歌う辭 六言 水の數に依る

歲月は暮れてはしりさり、黒帝は坎徳をおさめ、冬を司る。

黒い雲がたちこめて、鳥の路を暗くし、白い雲が湧き起り、天の果てまで連なる。

雷が地中にあり、まだ光が微かなままである冬には、國家の典章制度をととのえ、關所を閉ざして商人の往來を止める。

四つの季節がすべてめぐって、万物はひとまわりして終わりを迎え、天下にあまねく福をもたらす。

朝の時間は短く、夜は長い。陰の氣が極まると、微かな陽光が射しはじめる。

鵲が巢を作ろうとする冬の終わり頃には、氷も溶けて、氣によつて水が流れ、風が吹いて泉を動かすようになる。

右は黒帝を歌う辭。六言。水の生數に依る。

○押韻 「馳・規・涯」は上平5「支」。「光」は下平11「唐」、「梁・郷」は下平10「陽」。「延・宣・泉」は下平2「仙」。

①歳月既晏方馳 『楚辭』九歌・山鬼に「留靈脩兮憺忘歸、歲既 中華書局本は、「歳月既晏方馳」を「歲既暮日方馳」に作る。

晏兮孰華予」、王逸注に「晏、晚也。」「南齊書」、「藝文類聚」、 ②靈乘坎徳司規 「坎」は水を表す、北方の卦。『易』説卦に「坎

者水也。正北方之卦也、勞卦也、萬物之所歸也。」また『漢書』

魏相伝に「北方之神顛頊、乘坎執權司冬」、木華『海賦』(『文

選』卷一二)に「曠哉坎德、卑以自居」、李善注に「周易曰、

坎爲水」とある。「規」は法則。晋の温嶠「侍臣箴」(『藝文類

聚』卷一六)に「近臣司規、敢告常從。」

③玄雲合晦鳥路 「玄雲」は、『楚辭』九歌・大司命に「廣開兮

天門、紛吾乘兮玄雲。」「鳥路」は鳥の通り道。謝朓「暫使下都

夜發新林至京邑贈西府同僚」(『文選』卷二六)に「風雲有鳥路、

江漢恨無梁」、李善注に「南中八志曰、交阯郡治龍編縣、自興

古鳥道四百里。」「路」は『南齊書』樂志では「蹊」に、『藝文

類聚』卷四三は「歸」に作る。

④白雲繁亘天涯 謝惠連「雪賦」(『文選』卷一三)に「歲將暮、

時既昏。寒風積、愁雲繁。」

「亘」については、班固「西都賦」(『文選』卷一)に「自未

央而連桂宮、北彌明光而亘長樂」、李善注に「方言曰、亘、竟

也。」

⑤雷在地 『易』復に「象曰、雷在地中復。先王以至日閉關、商

旅不行、后不省方」、注に「方、事也。冬至陰之復也、夏至陽

之復也。」「雷在地」は、冬の間、雷が地中に隠れていること。

なお、『藝文類聚』には「雷在地時未光」以下の句が無い。

⑥飭國典閉關梁 「飭國典」は国の典章制度を整えること。『礼

記』月令に「季冬之月……天子乃與公卿大夫、共飭國典」、注

に「飭國典者、和六典之法也。」「閉關梁」は、関所を閉ざして

商旅を往来させないこと。『後漢書』章帝紀に「(元和二年)冬

十一月壬辰、日南至、初閉關梁」、李賢注に「易曰、老王以至

日閉關、商旅不行。」前掲⑤『易』復参照。また、『淮南子』天

文訓に「廣莫風至則閉關梁、決刑罰」、高誘注に「象冬閉藏、

不通關梁也。罰刑疑者、於是順時而決之」とある。

⑦四節遍萬物殿 「四節」は四季。『後漢書』楊賜伝に「今城外

之苑、已有五六、可以逞情意、順四節也」、李賢注に「四節、

謂春蒐、夏苗、秋獮、冬狩也。」「遍」は「徧」に同じ。あまね

くゆきわたること。『尚書』舜典に「望于山川、徧于羣神。」

「殿」は軍の最後尾をいうが、ここでは冬が四季のめぐりの

最後にあたることをいう。『論語』雍也に「孟之反不伐、奔而

殿。」注に「馬曰、殿在軍後、前曰啓、後曰殿。」

⑧福九域祚八郷 「九域」は『漢書』律曆志下に「祭典曰、共工

氏伯九域。」潘勖「冊魏公九錫文」(『文選』卷三五)に「綏爰九域、罔不率俾」、李善注に「薛君曰、九域、九州也」、呂向注に「九域、天下也。」「祚」は福、さいわいすること。『左伝』

宣公三年に「天祚明德、有所底止。」「八郷」は『漢書』礼楽志二に「郊祀歌十九章其詩曰、……牲繭栗、棗盛香、尊桂酒、賓八郷」、顔師古注に「八郷、八方之神」。『宋書』樂志二「皇帝

還東壁受福酒奏嘉時之樂舞詞」に「澄明臨四表、精華延八郷。」

⑨ 晨晷促夕漏延

「晷」「漏」はいずれも時を測るもの。『後漢書』律曆志中に「孝章皇帝曆度審正、圖儀晷漏、與天相應、不可復尚」とあり、転じて「晷漏」は時間を表す。

⑩ 太陰極微陽宣

「太陰」は冬の氣。董仲舒『春秋繁露』官制象天に「是故春者、少陽之選也。夏者、太陽之選也。秋者、少陰之選也。冬者、太陰之選也。」蔡邕『独断』上に「冬爲太陰、盛寒爲水、祀之於行。」

「微陽」は、『左伝』莊公二十九年に「冬十二月、……火見而致用、水昏正而藏、日至而畢」、杜預注に「日南至、微陽始動、故土功息。」また潘岳「秋興賦」(『文選』卷一三)に「何

微陽之短晷、覺涼夜之方永。」「宣」は『左伝』昭公元年に「台駘能業其官、宣汾洮、障大澤、以處大原」、杜預注に「宣、猶通也。」

⑪ 鵲將巢

『礼記』月令に「季冬之月……鴈北郷、鵲始巢、雉雊、雞乳」、注に「皆記時候也。雉雊鳴也。」

⑫ 氣濡水風動泉

「濡」は潤す。『易』夬に「君子夬夬、獨行遇雨、若濡有愠。無咎。」風が吹いて水が動くことについては、『易』渙に「風行水上渙、先王以享于帝立廟」、疏に「風行水上渙者、風行水上激動波濤散釋之象」とある。雪解けの水が流れるさまについては、陶淵明「婦去來辭」(『文選』卷四五)に「木欣欣以向榮、泉涓涓而始流」とある。

⑬ 黑帝

「黑帝」は北方を司る神。『史記』天官書に「黑帝行德、天關爲之動」、正義に「黑帝、北方叶光紀之帝也。冬萬物閉藏、爲之動、爲之開閉也。」

⑭ 依水數

「水數」については、『南斉書』樂志に「宋孝武使謝莊造辭、莊依五行數、……水數用六。」「歌青帝詞」注⑭参照。

蘊禮容^① 餘樂度

禮容を蘊え 樂度を餘にす

靈方留 景欲暮^②

靈は方に留まらんとし 景は暮れんと欲す

開九重^③ 肅五達^④

九重開き 五達肅く

鳳參差^⑤ 龍已沫^⑥

鳳は參差たり 龍は已に沫く

雲既動 河既梁^⑦

雲は既に動き 河は既に梁あり

萬里照 四空香^⑧

萬里照き 四空香る

神之車 歸清都^⑨

神之車は 清都に歸る

璇庭寂^⑩ 玉殿虛^⑪

璇庭は寂しく 玉殿は虚し

睿化凝^⑫ 孝風熾^⑬

睿化は凝まり 孝風熾なり

顧靈心^⑭ 結皇思^⑮

靈心を顧み 皇思を結ばる

右送神歌辭 漢郊祀送神 亦三言^⑯

右は送神歌辭 漢の郊祀の送神も亦た三言なり

右天郊饗神歌

右は天郊饗神歌

礼と樂の様式がととのつているので、

神靈はまさに留まろうとし、日は暮れようとしている。

九重の天門が開き、五方の道は導くように開かれる。

鳳凰は羽をはばたかせてうずうずし、龍は泡を吹きつつ行くのを待っている。

雲はもう動き、河にもすでに橋がかかり、

万里の彼方が輝き、四方の空が芳しく香る。

神々の乗る車が天の宮殿へとお帰りになると、

さきほどまで居られた宮殿は寂しく虚ろ。

優れた教えはしかと定まり、孝の風気も盛んとなる。

(帰りにたくない) 神の御心を振り返ると、皇思(孝武帝の心)は結ばれる。

右は送神歌の歌辞。漢の郊祀歌の送神歌も三言である。

右は天郊で神をもてなす歌。

○押韻 「度・暮」は去声11「暮」。「達」は入声12「曷」、「沫」は入声13「末」。「梁・香」は下平10「陽」。「都・虚」は上平11「模」。

「熾・思」は去声7「志」。

① 蘊禮容 「禮容」は礼のかたち。『史記』孔子世家に「孔子爲

兒嬉戲、常陳俎豆、設禮容。」「蘊」は蓄える。『左伝』昭公十

年に「蘊利生孽、姑使無蘊乎」、注に「蘊、畜也。」

② 靈方留 景欲暮 左思「吳都賦」(『文選』卷五)に「精靈留其

山阿、翫其奇麗也」、呂向注に「阿、曲也。精靈、神仙之類。

在其山曲、翫其奇異美麗之事。」

③ 開九重 「九重」は天。『楚辞』天問に「圓則九重、孰營度之。」

また『漢書』礼楽志に「郊祀歌十九章其詩曰、……九重開、靈

之府。(師古曰、天有九重、言皆開門、而來降厥福)とある。

④ 肅五達 「肅」は導く。『礼記』曲礼上に「主人肅客而入」、注

に「肅、進也。進客謂道之。」「五達」は、五方に繋がる道。『爾

雅』釈宮に「五達謂之康、六達謂之莊。」また『史記』酈生列

伝に「夫陳留、天下之衝、四通五達之郊也」、集解に「如淳曰、

四面中央、凡五達也。瓊曰、四通五達、言無險阻也」とある。

⑤ 鳳參差 「參差」は鳳凰の羽が不揃いな様。ここでは神の車の

先導をするのを待ち構える様をいうか。『楚辞』九歌・雲中君

に「望夫君兮未來、吹參差兮誰思」、補注に「風俗通云、舜作簫、其形參差、象鳳翼參差不齊之貌。」

⑥龍已沫 「沫」はあわぶくこと。「龍已沫」は龍が神の車を先

導するために待機するさま。『楚辭』九歌・雲中君に「龍駕兮帝服、聊翱遊兮周章」、王逸注に「龍駕、言雲神駕龍也。」また傳毅「舞賦」(『文選』卷一七)に「龍驥橫舉、揚鑣飛沫」、李善注に「鑣、馬勒旁鐵也。馬舉首而橫走、動鑣則飛馬口之沫也。」中華書局標点本では「沫」を「秣」に作る。

⑦河既梁 「梁」は橋をかけること。『左伝』莊公四年に「令尹門祁、莫敖屈重、除道梁澆」、注に「梁、橋也。」

⑧四空香 「四空」は四方の空。『宋書』樂志二「送神奏昭夏之樂舞歌詞二章」其一に「延八虛、闢四空。」

⑨歸清都 「清都」は天帝のすむ宮殿。『楚辭』遠遊に「集重陽入帝宮兮、造旬始而觀清都。」『列子』周穆王に「清都、紫微、鈞天、廣樂、帝之所居。」

⑩璇庭寂 「璇庭」は仙宮。『旧唐書』音樂志四「昭德皇后室酌獻用坤元樂章九首・送神用永和」に「移月御、返仙居。璇庭寂、

靈幄虛」と、類似した表現が見える。

⑪玉殿虛 「玉殿」は宮殿の美称。用例として、曹植「当車以駕行」に「歡坐玉殿、會諸貴客。」

⑫審化凝 『尚書』洪範に「審、作聖。」「審化」の用例として、沈約「賀齊明帝登阼啓」に「審化神行、無思不洽。」なお、「審化」は『南齊書』では「鴻化」に作る。「凝」は定まる。『易』坤に「象曰、履霜堅冰、陰始凝也。」『荀子』議兵に「兼并易能也、唯堅凝之難焉」、唐の楊倞注に「凝、定也。」

⑬孝風熾 「熾」はさかんさま。『毛詩』小雅・六月に「玃犹孔熾、我是用急」、毛伝に「熾、盛也」とある。

⑭顧靈心 『宋書』樂志二、荀勗「食举樂東西廂歌・翼翼」に「厚德載物、靈心隆貴。」『宋書』文帝紀に「(京口)苞總形勝、實唯名都、故能光宅靈心、克昌帝業。」「靈心」はここでは神の心。

⑮結皇思 「皇思」は他に用例なし。張載「贈虞顯度詩」(『藝文類聚』卷三二)に「離居一何濶、結思如廻川。」

⑯亦三言 『漢書』礼樂志に見える「郊祀歌十九章」の「練時日」「天馬」「華燗燗」「五神」「朝龍首」「象載瑜」「赤蛟」が三言。

(林 香奈)

魏兪兒舞歌四篇^① 魏國初建所用、後於太祖廟並作之。

魏の兪兒舞歌四篇 魏國初めて建てられしときに用うる所、後に太祖廟に於いて並びに之を作す。

魏の兪兒舞歌四篇 魏國が建てられたばかりの頃に用いられたもので、後には太祖（曹操）の廟でそろって演奏された。

王粲造

王粲造る

漢初建國家^④ 匡九州^{⑤⑥}

漢初めて國家を建て 九州を匡^{すく}う

蠻荊震服^{⑦⑧} 五刃三革^⑨休

蠻荊震服し 五刃三革^や休む

安不忘備武樂脩^⑩

安んじて武樂を備えて脩むるを忘れず

宴我賓師^⑪ 敬用御天^⑫

我が賓師を宴し 敬んで用いて天を御し

永樂無憂^⑬

永えに樂しみて憂い無し

子孫受百福^⑭ 常與松喬遊^⑮

子孫百福を受け 常に松喬と遊ぶ

蒸庶德^⑯ 莫不成歡柔^⑰

蒸庶德として 咸な歡び柔らがざる莫し

右は矛兪新福歌^⑱

右は矛兪新福歌

漢が初めて王朝を建てて、中国全土（の危難）を救った。

楚の蛮族は震え上がって服従し、武器や防具を用いる兵事が終息した。

平安を得ても武徳を高らかに歌う武樂を忘れることはない。

わが元を集った客人と將士をもてなし、つつしんで用いて天下を統治すれば、
とこしえに楽しんで憂えることがない。

子々孫々あまたの福を享受して、いつも仙人の赤松子や王子喬と交わり遊ぶ。

人々はそれを徳のある素晴らしいことだと感じ、一人のこらず和やかに楽しむのである。

右は矛兪新福歌。

○押韻 「州・休・脩・憂・遊・柔」は下平18「尤」。

①魏兪兒舞歌四篇 漢の高祖劉邦が漢王となった際に目にして樂

人に習得させたという巴渝（兪）舞に基づいて王粲が作った舞

歌辞。「兪兒舞」は、雜舞の名前。巴兪舞ともいう。「兪」は地。

「渝」に同じ。『史記』司馬相如列伝に「巴兪宋蔡、淮南于遮、

集解に「郭璞曰、巴西閬中有兪水、獠人居其上、皆剛勇好舞、

漢高募取以平三秦。後使樂府習之、因名巴兪舞也。」また、『漢

書』札樂志に「巴兪鼓員三十六人」、顔師古注に「巴、巴人也。

兪、兪人也。當高祖初爲漢王、得巴兪人、並趨捷善鬪、與之定

三秦滅楚、因存其武樂也。巴兪之樂因此始也。巴即今之巴州、

兪即今之渝州、各其本地。」『後漢書』南蠻西南夷列伝・南蠻に

「至高祖爲漢王、發夷人還伐三秦。秦地既定、乃遣還巴中、：

閬中有渝水、其人多居水左右。天性勁勇、初爲漢前鋒、數

陷陳。俗喜歌舞、高祖觀之、曰、此武王伐紂之歌也。乃命樂人

習之、所謂巴渝舞也。遂世世服從。」王粲がこれらの歌辞を作

った経緯については、『晋書』樂志上に「漢高祖自蜀漢將定三

秦、閬中范因率實人以從帝、爲前鋒。及定秦中、封因爲閬中侯、

復實人七姓。其俗喜舞、高祖樂其猛銳、數觀其舞、後使樂人習

之。閬中有渝水、因其所居、故名曰巴渝舞。舞曲有矛渝本歌曲

・安弩渝本歌曲・安臺本歌曲・行辭本歌曲、總四篇。其辭既古、

莫能曉其句度。魏初、乃使軍謀祭酒王粲改創其詞。粲問巴渝帥

李管・种玉歌曲意、試使歌、聽之、以考校歌曲、而爲之改爲矛
渝新福歌曲・弩渝新福歌曲・安臺新福歌曲・行辭新福歌曲、行
辭以述魏德。」

② 太祖 「太祖」は魏の礎を築いた曹操（一五五―二一〇）の
こと。『三國志』魏書・武帝紀に「（建安）十八年春正月、進軍
濡須口、攻破權江西營、獲權都督公孫陽、乃引軍還。詔書并十
四州、復爲九州。夏四月、至鄴。五月丙申、天子使御史大夫郗
慮持節策命公爲魏公曰、……。秋七月、始建魏社稷宗廟。」

③ 王粲 王粲（一七七―二二七）、字は仲宣。漢の名家の出身で
曹操に仕えた。建安七子の一人。『三國志』魏書・王粲伝に「王
粲字仲宣、山陽高平人也。曾祖父龔、祖父暢、皆爲漢三公。……
著詩・賦・論・議垂六十篇。建安二十一年、從征吳。二十二
年春、道病卒、時年四十一。……始文帝爲五官將、及平原侯植
皆好文學。粲與北海徐幹字偉長・廣陵陳琳字孔璋・陳留阮瑀字
元瑜・汝南應瑒字德璉・東平劉楨字公幹並見友善。」王粲が「魏
兪兒舞歌」を作ったことについては、注①参照。

④ 國家 國家、王朝のこと。古代、諸侯の封地を国と呼び、大夫
の封地を家と呼んだ。「國家」という場合は、広く天子や諸侯

が統治する領土も意味した。『尚書』立政に「其惟吉士、用勳
相我國家。」ここでは、劉邦が漢王朝を建てたことをいう。『漢
書』高帝紀下に見える劉邦の言葉に「填國家、撫百姓、給餉餽、
不絕糧道、吾不如蕭何。」

⑤ 匡 正し救う。『尚書』盤庚上に「不能胥匡以生、卜稽曰、其
如台。先王有服、恪謹天命、茲猶不常寧、不常厥邑、于今五邦。」
『毛詩』小雅・六月に「王于出征、以匡王國」、鄭箋に「于、
曰。匡、正也。王曰、今女出征玁狁、以正王國之封畿。」また、
『漢書』高后紀・呂氏に「二年春、詔曰、高皇帝匡飭天下、諸
有功者皆受分地爲列侯、萬民大安、莫不受休德。」

⑥ 九州 中国のこと。古代の中国には九つの州が置かれていた。
『尚書』禹貢に「禹別九州。」とあり、続いて「冀州」「兗州」
「青州」「徐州」「揚州」「荊州」「豫州」「梁州」「雍州」という
九つの州名が見える。後に広く中国全体を指すようになった。
注②参照。

⑦ 蠻荊 南方、ここでは楚の人々を指す。長江中流域の荊州あた
りが春秋時代の楚の国であった。『毛詩』小雅・采芣に「蠢爾
蠻荊、大邦爲讎。」漢の高祖劉邦は天下を統一する際、楚の項

羽と覇権を争った。『史記』項羽本紀に「項籍者、下相人也、
字羽。……項氏世世爲楚將、封於項、故姓項氏。」

⑧震服 震えるように恐れ、服従すること。また、そうさせること。

と。『後漢書』祭祀志下「光武皇帝崩、明帝即位、以光武帝撥
亂中興、更爲起廟、尊號曰世祖廟」の注に引かれる「東觀書」

に「光武皇帝受命中興、撥亂反正、武暢方外、震服百蠻、戎狄
奉貢、宇內治平、登封告成、修建三雍、肅穆典祀、功德巍巍、

比隆前代。以兵平亂、武功盛大。歌所以詠德、舞所以象功、世
祖廟樂名宜曰大武之舞。」

⑨五刃三革 「五刃」は五種類の武器。「三革」は三種類の革製

防具。『国語』齊語に「教大成、定三革、隱五刃」、韋昭注に「三
革、甲・冑・盾也。五刃、刀・劍・矛・戟・矢也。」

⑩安不忘備武樂情 『周易』繫辭伝下に「是故君子安而不忘危、

存而不忘亡、治而不忘亂、是以身安而國家可保也。」「武樂」は
武徳を称揚する舞樂。『公羊伝』宣公八年に「萬者何。干舞也、

何休注に「干謂楯也、能爲人扞難而不使人害人、故聖王貴之、以
爲武樂。」

⑪賓師 官に就かずにいながら君主の礼遇を受ける客人とされ、

『漢語大詞典』には用例として本歌辭が挙げられるが、同じ王
粲・魏兪兒舞歌の「安台新福歌曲」に「式宴賓與師」の句があ

り、『毛詩』秦風・無衣に「王于與師、脩我戈矛、與子同仇。」

とあるのなどに拠って、「賓（賓客）と師（將士）」と解した。
⑫永樂無憂 とこしえに楽しんで憂えることがないこと。『礼記』

樂記に「王者功成作樂、治定制禮。其功大者其樂備、其治辯者
其禮具。……及夫敦樂而無憂、禮備而不偏者、其唯大聖乎。」

⑬敬用 つつしんで用いること。『尚書』洪範に「天乃錫禹洪範
九疇。彝倫攸叙。初一日五行。次二曰敬用五事。」

⑭御天 天道を統御して天下を治めること。『周易』乾卦に「時

乘六龍以御天。」
⑮百福 たくさんの福。『毛詩』大雅・仮楽に「千祿百福、子孫
千億。」

⑯松喬 赤松子（赤誦子とも）と王子喬。伝説上の仙人。漢・劉

向の名が冠せられる『列仙伝』や晋・干宝『搜神記』に見える
ほか、『淮南子』齊俗訓に「今夫王喬・赤誦子、吹嘯呼吸、吐

故納新、遺行去智、抱素返眞、以遊玄眇、上通雲天。」なお、『宋
書』樂志三・曹操「氣出信」（駕六龍）に「神仙金止玉亭、來

者爲誰。赤松王喬、乃德旋之門。樂共飲食到黃昏、多駕合坐、

⑱ 歡柔 よろこび和やかに楽しむこと。

萬歲長宜子孫、「秋胡行」（願登）に「世言伯陽、殊不知老、

⑲ 矛兪新福歌 「矛兪」は矛を用いた兪兪舞。「新福歌」は新た

赤松王喬、亦云得道」と見えるなど、赤松子と王子喬は、曹操

に福を祈って作った歌辞の意か。注①の『晋書』樂志に見える

の樂府にしばしば詠じられている。

ように、もともと「矛渝本歌曲」「安弩渝本歌曲」「安臺本歌曲」

⑳ 蒸庶 庶民。『史記』淮南衡山列伝に「當今陛下臨制天下、一

「行辭本歌曲」があつたのを改めて歌辞を制したものである。

齊海内、汎愛蒸庶、布德施惠。』『三國志』魏書・崔琰伝に「今

天下分崩、九州幅裂、……冀方蒸庶、暴骨原野。」

材官選士^① 劔弩錯陳^④

材官選士 劔弩錯わり陳ぶ

應桴蹈節^⑤ 俯仰若神^③

桴に應じて節を蹈み 俯仰神の若し

綏我武烈^⑥ 篤我淳仁^②

我が武烈を綏んじ 我が淳仁を篤くす

自東自西^④ 莫不來賓^④

東自り西自り 來たりて賓せざる莫し

右弩兪新福歌^⑧

右は弩兪新福歌

勇猛な兵士と優れた士人がいて、つるぎといしゆみが交わり並んでいる。

鼓の撥のリズムに合わせて足を踏めば、その様子はまるで神のよう。

わが勇猛さを落ち着かせて（武威があるようにし）、わが敦厚なる心ばえを手厚くする。

（そうして）東からも西からも、誰も彼もが帰順して来るのだ。

右は弩兪新福歌。

○押韻 「陳・神・仁・賓」は上平17「眞」。

①材官 勇武の兵士。『史記』張丞相列伝・申屠嘉に「申屠丞相

嘉者、梁人、以材官蹶張從高帝擊項籍、遷爲隊率」、集解に「徐

廣曰、勇健有材力開張。駟案、如淳曰、材官之多力、能腳踏強

弩張之、故曰蹶張。律有蹶張士。」

②選士 才能に優れ、推薦された士人。『礼記』王制に「命鄉論

秀士、升之司徒、曰選士。」

③劍弩 劍と弩いしゆみ。用例として、西晋・傅玄の「晋宣武舞歌四

篇・惟聖皇篇・矛兪第一」（『宋書』樂志二）に「劍弩齊列、戈

矛爲之始。」

④錯陳 交わり並ぶこと。『毛詩』小雅・楚茨に「獻鱗交错、禮

儀卒度」、毛伝に「東西爲交、邪行爲錯。」

⑤桴 鼓のばち（「枹」に通ずる）。『礼記』礼運に「其燔黍捭豚、

汗尊而抔飲、蕢桴而土鼓、猶若可以致其敬於鬼神。」

⑥蹈節 リズムに合わせて足を踏むこと。『孟子』離婁上に「禮

之實、節文斯二者是也。樂之實、樂斯二者。樂則生矣、生則惡

可已也。惡可已、則不知足之蹈之、手之舞之」、趙岐注に「樂

此事親從兄、出於中心、則樂生其中矣。樂生之至、安可已也、

豈能自覺足蹈節手舞曲哉。」

⑦俯仰 様子、立ち居振る舞い。『史記』范雎蔡沢列伝・范雎に

「然左右多竊聽者、范雎恐、未敢言内、先言外事、以觀秦王之

俯仰。」

⑧若神 神のごとくに。『漢書』成帝紀の贊に「臣之姑充後官爲

婕妤、父子昆弟侍帷幄、數爲臣言成帝善修容儀、升車正立、不

内顧、不疾言、不親指、臨朝淵嘿、尊嚴若神、可謂穆穆天子之

容者矣。」

⑨綏 安んずる。『毛詩』大雅・民勞に「民亦勞止、汔可小康。

惠此中國、以綏四方」、鄭箋に「康、綏、皆安也。」

⑩武烈 勇ましく猛々しいこと。『国語』周語下に「成王能明文

昭、能定武烈者也」、韋昭注に「烈、威也。言能明其文使之昭、

定其武使之威。」

⑪篤 誠を尽くす。『論語』泰伯に「君子篤於親、則民興於仁。」

⑭莫不來賓 帰順しない者が不在。「賓」は帰順すること。『史記』

⑫淳仁 敦厚で思いやりがあるさま。またそのような人。王褒「四

秦始皇本紀に「二十有六年、初并天下、罔不賓服。」「漢書」傳

子講徳論」(『文選』卷五二)に「故大漢之爲政也、崇簡易、尚

常鄭甘陳段伝・陳湯に「呼韓邪單于見郅支已誅、且喜且懼、鄉

寛柔、進淳仁、擧賢才、上下無怨、民用和睦。」

風馳義、稽首來賓、願守北藩、累世稱臣。」

⑬自東自西 東から西から。全土から。『毛詩』大雅・文王有声

⑮弩兪新福歌 弩を持って舞う兪児舞歌。

に「鎬京辟靡、自西自東、自南自北、無思不服。皇王烝哉。」

我功既定 庶士咸綏

我が功既に定まり 庶士咸な綏んず

樂陳我廣庭 式宴賓與師

樂を我が廣庭に陳ね 式つて賓と師とを宴す

昭文徳 宣武威

文徳を昭かにし 武威を宣ぶ

平九有 撫民黎

九有を平らげ 民黎を撫す

荷天寵 延壽尸

天寵を荷け 壽を尸に延く

千載莫我違

千載我に違う莫し

右安臺新福歌曲

右は安臺新福歌曲

わが功業はすでに成し遂げられ、多くの人士はみな安んじた。

樂舞をわが宮殿の広大な庭に設け、これによって賓客と將士をもてなす。

文徳を明らかに示し、武威を広く知らしめる。

中国全土を平定し、民衆を安んずる。

天の恩寵を受け、長寿を主人に捧げる。

(こうしたことは)たとえ千年経っても違うことがないのだ。

右は安台新福歌曲。

○押韻 「綏・師・戸」は上平6「脂」、「威・違」は上平8「微」、「黎」は上平12「齊」。

①我功 『樂府詩集』卷五三、『建安七子集』は「武功」に作る。

暢、振動四極、禽滅六王。」

②庶士 諸事に関わる多くの人士。『尚書』秦誓に「王曰、嗟我

⑧九有 九州。中国全土を指す。『毛詩』商頌・玄鳥に「方命厥

友邦冢君、越我御事庶士、明聽誓」、疏に「下及治事衆士、謂國君以外卿大夫及士諸掌事者。」

后、奄有九有」、毛伝に「九有、九州也。」

③庭 殿や堂の前庭。『毛詩』周頌・有瞽に「有瞽有瞽、在周之

⑨民黎 民衆のこと。黎民。『尚書』堯典に「百姓昭明、協和萬

庭。……應田縣鼓、鞀磬祝圉。」

邦、黎民於變時雍」、孔伝に「昭亦明也。協、合。黎、衆。……

④式 もつて。『毛詩』小雅・南有嘉魚に「君子有酒、嘉賓式燕

言天下衆民皆變化化上、是以風俗大和。」

以樂。」

⑩荷 受けること。『左伝』昭公三年に「一爲禮於晉、猶荷其祿。

⑤賓與師 賓客と将士。「矛盾新福歌」の注⑩参照。

況以禮終始乎。」

⑥文徳 礼楽による教化。武功と対をなす。『毛詩』大雅・江漢

⑪天寵 天の恩寵。『周易』師卦・九二爻辞象伝に「在師中吉、

に「矢其文徳、洽此四國。」

承天寵也。」

⑦武威 猛々しく威光あること。『史記』秦始皇本紀に「武威旁

⑫延壽 寿命を延ばす。長寿を折ること。『史記』封禪書に「刻

曰、人主延壽。」

⑬尸 宴の主人。古の祭祀の際に死者に代わって祭祀を受ける、

樂志に「夫樂本情性、浹肌膚而臧骨髓、雖經乎千載、其遺風餘烈尚猶不絕。」

死者の魂を象徴する立場の人を指した。『毛詩』小雅・楚茨に

⑭安臺新福歌曲 台を設けてその上で行う愈舞歌か。『史記』封

「神具醉止、皇尸載起。鼓鍾送尸、神保聿歸。」

禘書に「乃合越巫立越祝祠、安臺無壇、亦祠天神上帝百鬼、而

⑮千載莫我違 「千載」は千年。長久な時間をいう。『漢書』礼

以雞卜。」

神武用師士素厲

神武師士を用いること素より厲し

仁恩廣覆 猛節横逝

仁恩廣く覆い 猛節横に逝く

自古立功 莫我弘大

古より功を立つ 我より弘大なるは莫し

桓桓征四國 爰及海裔

桓桓として四國に征き 爰に海裔に及ぶ

漢國保長慶 垂祚延萬世

漢國長慶を保ち 垂祚萬世に延びん

右行辭新福歌曲

右は行辭新福歌曲

神武たるお方は軍事においてもより勇猛である。

その仁徳恩恵は遍く覆うように行きわたり、威嚴はほとばしるように轟いている。

いにしえから功業を打ち立てた者のなかで、我がお方ほど偉大な存在はない。

勇猛に四方の国々を征伐し、そうして辺境の海辺にまで至った。

漢の国家は長しえの慶びを保ち、万世にわたって幸福のこし伝えることだろう。

右は行辞新福歌曲。

○押韻 「厲・逝・裔・世」は去声13「祭」、「大」は去声14「泰」。

①神武 神明で威武あること。『周易』繫辭伝上に「古之聰明叡知神武而不殺者夫。」『漢書』刑法志に「漢興、高祖躬神武之材、行寬仁之厚、總擊英雄、以誅秦項。」ここでは劉邦を下敷きにしたつ曹操をいう。

②師士 軍隊。『毛詩』秦風・無衣に「王于興師、脩我戈矛、與子同仇。」

③廣覆 仁徳をもって広く覆うこと。『孟子』離婁上に「既竭心思焉、繼之以不忍人之政、而仁覆天下矣。」

④猛節 威厳があること。「節」は操守。『左伝』成公十五年「子臧辭曰、前志有之曰、聖達節、次守節、下失節。」

⑤横逝 ほしいままに行くこと。『後漢書』馮衍伝下に「病沒世之不稱兮、願横逝而無由」、李賢注に「所病終身之後、名譽不稱、又願縱横遠逝、而其路無由也。」

⑥桓桓 勇ましく強いさま。『尚書』牧誓に「勗哉夫子、尚桓桓」、

孔伝に「桓桓、武貌。」『毛詩』魯頌・泂水に「桓桓于征、狄彼東南」、毛伝に「桓桓、威武貌。」

⑦四國 四方。『毛詩』大雅・崧高に「揀此萬邦、聞于四國」、鄭箋に「揀、順也。四國、猶言四方也。」

⑧海裔 辺境の海辺。「裔」は辺境の地。『左伝』文公十八年に「流四凶族、渾敦・窮奇・檮杌・饕餮、投諸四裔」、杜預注に「裔、遠也。」

⑨垂祚 後世に幸いをのこし示すこと。『後漢書』左周黃列伝・左雄の上疏文に「追配文・宣中興之軌、流光垂祚、永世不刊。」

⑩行辭新福歌曲 「行辭」は未詳。『大戴礼記』衛將軍文子に「孔子曰、貌以擯禮、禮以擯辭、是之謂也」、注に「禮待貌而行辭、得禮而發言。貌所以擯贊三千之儀也」とあるのに拠れば、儀礼のなかで言葉が発することとなる。「矛兪新福歌」注①に引く『晋書』樂志には「行辭以述魏徳」とある。

(狩野 雄)

(さとうたけし・広島大学教授)

(かまたにたけし・神戸大学教授)

(さたけやすこ・東北大学教授)

(やながわじゅんこ・県立広島大学教授)

(はやしかな・京都府立大学教授)

(かのうゆう・相模女子大学教授)